

鹿央町埋蔵文化財発掘調査報告書

広寺の上・向原・天神免遺跡

広域営農団地農道整備事業鹿本地区
農道工事に伴う埋蔵文化財調査報告

2001年3月

熊本県鹿本郡鹿央町教育委員会



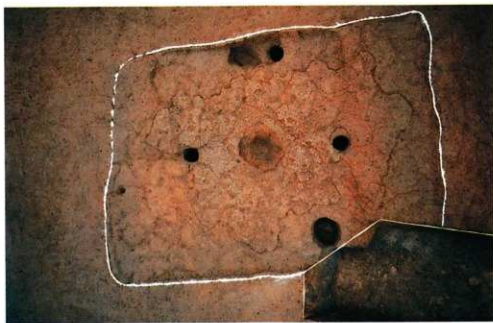
寺の上・天神免・向原遺跡遠景〈東側より撮影〉



寺の上遺跡 遺構垂直撮影〈写真上面が北側〉



向原遺跡全景〈東側から撮影〉



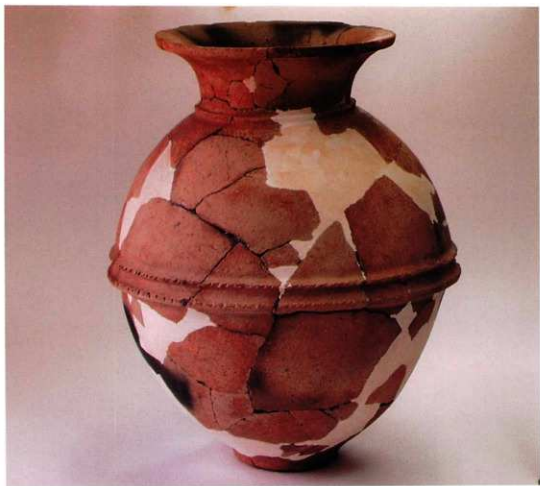
SH10 竪穴住居〈垂直撮影上方が南〉



天神免遺跡遠景



天神免遺跡 遺構垂直撮影



向原遺跡 3号住居跡出土(甕)



向原遺跡 3号住居跡出土(鉢)

序 文

鹿央町は、鹿本都市の中央に位置し、菊池川流域の沃野を控え、周りに米野山・国見山などをめぐらし、広々とした畑作地帯がひらけた自然の幸に恵まれたところです。この地は、菊池川流域の県立の歴史公園である肥後古代の森の一区画であり、県指定の史跡を含む多くの遺跡が存在しており、古代から現在にかけて私達に多くの歴史を語りかけてくれています。

このたび鹿央町教育委員会では、平成8年度に実施した城尾屋敷遺跡の発掘調査につづいて、広地区の広城営農団地農道整備事業鹿本地区農道工事の予定地となった、字寺の上・字向原・字天神免の三地区において埋蔵文化財の発掘調査を行いました。字寺の上の発掘地からは中世時代の土壌が多数出土しました。また、字向原の発掘地からは縄文・弥生時代の遺物や住居跡が出土し、字天神免からは弥生時代の甕棺や住居跡が出土しました。

今回の発掘調査で、新たに弥生時代の住居跡が2遺跡から確認されたことにより、広地区における弥生時代の解明に成果があったものと思います。

最後になりましたが、この発掘調査にあたり、ご理解・ご協力いただいた熊本県農政部、調査のご指導をいただいた熊本県文化課、ならびに発掘作業・整理作業に従事して頂いた関係各位に対し心よりお礼を申し上げます。

平成13年3月

鹿央町教育委員会
教育長 東

正 治

例 言

1. 本報告書は、広域営農団地農道整備事業に伴って、熊本県の予算を受け鹿央町教育委員会が平成9年度・10年度に実施した鹿央町大字広地内の寺の上・向原・天神免の3遺跡における発掘調査報告書である。同一工事路線区内にあり、それぞれ近距離の遺跡でもあり合冊を行った。
2. 各遺跡は、調査時期の早いものから順に掲載し中表紙により区別を行った。
3. 発掘調査は、鹿央町教育委員会が実施し、測量、実測、写真撮影等の一連の記録業務は委託した。
4. 本書に記載した図面の縮尺は遺物を1/3、遺構は1/40に極力統一をはかったが、やむなく縮尺を変更したものについては図中にスケール表示を行った。
5. 本書出土遺物の一覧表及び測図に注記された色調表示値は、日本色研事業株式会社発行の「新版標準土色帖」による。
6. 挿図に示したレベル数値は全て海拔高であり、図中に表示した方位は真北(DN)を採用した。
7. 現地調査における測図化、写真撮影は(株)文化財環境整備研究所に委託し、出土遺物の復元、実測、図版作成等の業務は(有)遺跡整備計画に委託した。
8. 本書の編集は鹿央町教育委員会・西林一弘が(有)遺跡整備計画の協力を受けて実施した。また各章・項の執筆者については目次において氏名を明記した。
9. 調査から報告書作成までの間、多くの指導・助言を頂いた関係各方面の方々は、それぞれの章において御芳名を記させて頂いた。
10. 本報告書に掲載した出土遺物、及び図面等全ての記録資料は、鹿央町教育委員会に保管されている。

目 次

序 章 調査に至る経緯と遺跡の位置環境

1、調査に至る経緯 (西林一弘)	1
2、遺跡の位置と環境 (丸山武水)	1
(1) 位置と地形 (西林)	1
(2) 鹿央町の遺跡	2

第1章 寺の上遺跡

I、調査の組織 (西林)	9
II、調査の経過 (西林)	11
III、調査の概要 (丸山)	13
(1) 遺構 (丸山)	14
イ、欄 列 (村上孝司)	14
ロ、掘立柱跡 (村上)	14
ハ、土 塼 (丸山)	14
1号土塼	14
2号土塼	17
3号土塼	17
4号土塼	17
5号土塼	17
6号土塼	17
7号土塼	17
ニ、溝 (村上)	19
1号溝	19
5号溝	19
2号溝	19
3・4号溝	21
ホ、道路状遺構 (丸山)	21
1号道路状遺構	21
2号道路状遺構	21
ヘ、住居跡 (丸山)	21
(2) 遺物 (丸山)	24
2号溝出土遺物	24

5号溝出土遺物	27
9号溝出土遺物	28
Ⅳ、まとめ	29

第2章 向原遺跡

Ⅰ、調査の組織 (西林)	31
Ⅱ、調査の経過 (西林)	33
Ⅲ、調査の概要 (丸山)	38
(1) 遺構	38
竪穴住居跡 (丸山)	38
1号竪穴住居跡 (蟹父雅史)	38
2号竪穴住居跡 (蟹父)	40
3号竪穴住居跡 (丸山)	41
4号竪穴住居跡 (丸山)	42
5号竪穴住居跡 (丸山)	42
(2) 遺物 (丸山)	44
縄文時代の出土遺物	44
縄文時代の土器	44
弥生時代の出土遺物	55
2号住居跡の出土遺物	55
3号住居跡の出土遺物	56
4号住居跡の出土遺物	57
5号住居跡の出土遺物	57
縄文時代の石器	60
Ⅳ、まとめ (丸山)	69

第3章 天神免遺跡

Ⅰ、調査の組織 (西林)	73
Ⅱ、調査の経過 (西林)	75
Ⅲ、調査の概要 (丸山)	80

参考文献一覧	95
後 期	96

挿図目次

第1図	鹿央町位置図	1
第2図	遺跡位置図	3
第3図	周辺遺跡分布図	6
第4図	寺の上遺跡グリッド設定図、同遺構位置図	15
第5図	寺の上遺跡柵列、掘立柱実測図	18
第6図	寺の上遺跡1・2・5号溝実測図	20
第7図	寺の上遺跡土壌実測図 (1)	22
第8図	寺の上遺跡土壌実測図 (2)	23
第9図	寺の上遺跡出土遺物実測図 (1)	25
第10図	寺の上遺跡出土遺物実測図 (2)	26
第11図	寺の上遺跡出土遺物実測図 (3)	27
第12図	向原遺跡グリッド設定図、同遺構位置図	37
第13図	向原遺跡1号竪穴住居跡実測図	39
第14図	向原遺跡2号竪穴住居跡実測図	40
第15図	向原遺跡3号竪穴住居跡実測図	41
第16図	向原遺跡4・5号竪穴住居跡実測図	43
第17図	向原遺跡出土遺物実測図 (1) 縄文土器	50
第18図	向原遺跡出土遺物実測図 (2) 縄文土器	51
第19図	向原遺跡出土遺物実測図 (3) 縄文土器	52
第20図	向原遺跡出土遺物実測図 (4) 縄文石器	53
第21図	向原遺跡出土遺物実測図 (5) 縄文石器	54
第22図	向原遺跡竪穴住居跡出土遺物実測図 (1)	61
第23図	向原遺跡竪穴住居跡出土遺物実測図 (2)	62
第24図	向原遺跡竪穴住居跡出土遺物実測図 (3)	63
第25図	向原遺跡竪穴住居跡出土遺物実測図 (4)	64
第26図	向原遺跡竪穴住居跡出土遺物実測図 (5)	65
第27図	向原遺跡竪穴住居跡出土遺物実測図 (6)	66
第28図	向原遺跡竪穴住居跡出土遺物実測図 (7)	67
第29図	向原遺跡竪穴住居跡出土遺物実測図 (8)	68
第30図	天神免遺跡グリッド設定図、同遺構位置図	82

第31図	天神免遺跡埋甕出土状態実測図 (1)	83
第32図	天神免遺跡埋甕出土状態実測図 (2)	84
第33図	天神免遺跡埋甕出土状態実測図 (3)	85
第34図	天神免遺跡埋甕出土状態実測図 (4)	86
第35図	天神免遺跡木棺墓、土塋実測図	87
第36図	天神免遺跡竪穴住居跡実測図 (1)	89
第37図	天神免遺跡竪穴住居跡実測図 (2)	90
第38図	天神免遺跡竪穴住居跡実測図 (3)	91
第39図	天神免遺跡出土遺物実測図 (1)	92
第40図	天神免遺跡出土遺物実測図 (2)	93
第41図	天神免遺跡出土遺物実測図 (3)	94

現場実測図作成	(株)文化財環境整備研究所
測図編集・製図	(有)遺跡整備計画
遺物実測図作成・製図	(有)遺跡整備計画
	丸山武水・村上孝司・鹽父雅史・石坂 妙

表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	7
第2表	天神免遺跡埋甕・木棺・土塋墓主軸方位と傾斜角	88

図版目次

寺の上遺跡

- 図版 1 表土剥ぎ(東から)
作業風景・浮土排土(西から)
- 図版 2 B-3 G 中世遺物出土状況(南から)
1号溝完掘状況(南から)
- 図版 3 2号溝遺物出土状況(南から)
2号溝土層断面(南から)
- 図版 4 2号溝検出状況(南から)
5号溝土層断面(南から)
- 図版 5 5号溝完掘状況(南から)
1・5・2号溝完掘状況(西から)
- 図版 6 2号土塹検出状況(南から)
2号土塹遺物出土状況(南から)
- 図版 7 3号土塹プラン確認(南から)
3号土塹検出状況(南から)
- 図版 8 4号土塹プラン確認(南から)
4号土塹完掘状況(西から)
- 図版 9 5号土塹検出状況(東から)
5号土塹完掘状況(東から)
- 図版10 7号土塹検出状況(南から)
調査区遠景(西から)

向原遺跡

- 図版11 1号住居跡検出状況(南から)
1号住居跡完掘状況(東から)
- 図版12 1号住居跡ピット内遺物(北から)
2号住居跡プラン確認(南から)
- 図版13 2号住居跡完掘状況(南から)
3号住居跡検出状況(東から)
- 図版14 3号住居跡遺物出土状況(南から)
3号住居跡遺物出土状況(南から)

- 図版15 3号住居跡遺物出土状況(南から)
3号住居跡完掘状況(東から)
- 図版16 4号住居跡検出状況(東から)
4号住居跡遺物出土状況(西から)
- 図版17 4号住居跡遺物出土状況(北から)
4号住居跡遺物出土状況(北から)
- 図版18 5号住居跡遺物出土状況(北から)
5号住居跡検出状況(東から)

天神免遺跡

- 図版19 下段 甕棺包蔵地区(調査前)(西から)
天神免遺跡(西から)
- 図版20 上段 表土剥ぎ
甕棺土壌確認状況
- 図版21 1号甕棺プラン確認(南から)
1号甕棺検出状況(南から)
- 図版22 2号甕棺プラン確認(北から)
2号甕棺検出状況(北から)
- 図版23 3号甕棺プラン確認(東から)
3号甕棺検出状況(東から)
- 図版24 4号甕棺プラン確認(南から)
4号甕棺検出状況(南から)
- 図版25 5号甕棺プラン確認(南から)
5号甕棺検出状況(南から)
- 図版26 6号甕棺プラン確認(南から)
6号甕棺検出状況(南から)
- 図版27 7号甕棺プラン確認(東から)
7号甕棺検出状況(東から)
- 図版28 8号甕棺プラン確認(南から)
8号甕棺検出状況(東から)
- 図版29 9号甕棺プラン確認(東から)
9号甕棺検出状況(東から)
- 図版30 1号土壌完掘状況(南から)
1号木棺墓完掘状況(東から)

- 図版31 2号木棺墓完掘状況(北から)
3号木棺墓完掘状況(東から)
- 図版32 1号住居跡検出状況(西から)
1号住居跡完掘状況(西から)
- 図版33 2号住居跡検出状況(北から)
3号住居跡完掘状況(北から)
- 図版34 4号住居跡検出状況(南から)
5号住居跡完掘状況(北から)
- 図版35 5号住居跡完掘状況(南から)
掘立柱建築物跡(南から)

遺物

- 図版36 寺の上遺跡・向原遺跡出土遺物 (1)
- 図版37 向原遺跡出土遺物 (2)
- 図版38 向原遺跡出土遺物 (3)
- 図版39 向原遺跡出土遺物 (4)
- 図版40 向原遺跡出土遺物 (5)
- 図版41 3遺跡出土石器

序章 調査に至る経緯と遺跡の位置環境

1. 調査に至る経緯

鹿本地区広域営農団地農道整備事業に伴い、鹿本郡鹿央町大字広地内における字寺の上(650㎡)、字向原(1550㎡)及び字天神免(450㎡)が工事予定地となった。

工事に先立ち、平成9年度に県文化課による試掘調査が実施され、字寺の上遺跡からは中世の遺物、字向原遺跡からは縄文・弥生時代の土器類と遺構の一部、字天神免遺跡からは弥生時代の甕棺片や多数の土器片及び遺構の一部(住居跡)が確認されたことで本調査が決定された。

調査は、熊本県農政部の委託で鹿央町教育委員会が実施した。熊本県文化課が調査の指導を行った。

2. 遺跡の位置と環境

(1) 位置と地形

鹿央町は熊本県西北に位置し、鹿本郡5町の中央部に広がる台地と、中山間地帯から成っている。

東は鹿本町、西は玉名郡菊水町、南は植木町と玉名郡玉東町に接し、北には山鹿市が位置している。県内では最も北側を流れ有明海に注ぐ一級河川菊池川の中流域地帯にあたり、町中央部を菊池川支流の岩原川が北に向かって流れている。玉東町及び菊水町と接する地域は標高約312mの米野山低山地にあたり、東側では菊池川支流の千田川が北に流れ、南側では同支流の江田川が西に向かって流れている。台地が中心の鹿央町ではこれら小支流による浸食で小規模な谷がいくつも形成されている。



第1図 鹿央町位置図

地理的交通網として、国道3号線が町の東部を走り、西部では九州自動車道が東西に縦断している。隣接する植木町方面からは熊本市から続く国道3号線に平行して伸びる旧豊前街道の道筋が西に折れ谷を渡り越して鹿央町内に入り難所と云われた乙貝坂を登り旧広町を抜けて山鹿市方面に伸びている。この旧街道筋では里数木(五里木)跡も残存していて寺の上遺跡もごく近い所に位置する。

町内では、近年まで実施された県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査が熊本県教委によって広範囲に実施されたが、弥生期、古墳期、古代・中世にかけて実に多くの遺構と遺物が検出され旧知の遺跡を含めるとその数と面積は広大なものとなっている。

国指定史跡として代表的な岩原古墳群(主墳双子塚古墳:全長107m)及びこの台地端に良好に残る阿蘇凝灰岩壁面に開口する大小の横穴墓群などの他、神社仏閣の古名刹も多く文化財の町として代名詞にもなっている。

本報告書に掲載した3遺跡の報告は、先に実施報告(1998年3月)した城尾屋敷遺跡の西に細い谷を挟んで連なる遺跡であり、広域農道用地内にかかる遺跡の縁辺も弥生時代から古墳期に及ぶ遺跡群に取り囲まれている。

(2) 鹿央町の遺跡

縄文時代以前の遺跡としては本格的調査の成果ではないが、現庁舎所在地周辺からの採集品として阿蘇系黒曜石製の削器、剥片尖頭器、石刃等がある。それと縄文期においては後期・晩期を中心に各種の調査に際し土器、石器類が出土しているが、他に縄文早期の押型文土器、円筒型粗製土器をはじめとして早期以降の遺物が出土し採集品を含めるとかなりの資料数になると思われるが、何れも遺構を伴ったものではない。

弥生時代になると遺跡の確認数も増加し岩原や広、千田の台地を中心に中期から後期にかけて竪穴住居跡、甕棺、木棺、土槨墓の密集が相次いで発見され、天神免ⁱ¹²や向原ⁱ¹³、吉井原の各遺跡の調査がなされた。各遺跡は単一の時期に集中しておらず古代、中世の遺構も切り合っていて長期間に及ぶ生活基盤の構成を物語っている。

これら一連の調査は旧山鹿高校考古学部による部分調査で遺跡の拡大が予測されていたものが近年まで実施された県営圃場整備事業に際しての発掘調査によって多大な成果として上げられている。しかし、事業の速さに追いつけず部分調査や報告が済んでいない事例も多く実態の把握が出来ていないことは残念である。

町内においては、過去に2例の青銅器出土例があり下米野では中広銅鈴ⁱ¹⁴、県教委調査の天神免遺跡から銅剣1点が採集された他、銅剣先端1点が検出されている。この他同期の遺跡として広・垣の内甕棺群ⁱ¹⁵、水原甕棺群ⁱ¹⁶、早馬塚甕棺群ⁱ¹⁷、千田中尾遺跡等ⁱ¹⁸が知られている他大規模開発及び道路工事等により部分、あるいは全面的に消滅した遺跡を上げれば菊池川中流域での弥



第2図 遺跡位置図

生期は一斉に花開いたと云える。近隣市町村を見渡してみると、山鹿、鹿本、七城、菊水、植木、西合志、玉名市など菊池川添いとその流域域では広大な範囲に環濠を伴う集落跡や墓域の調査もなされ現在も調査中の遺跡も多い。

鹿央町について記せば墓域群の発見、調査例の多大さに比して生活跡は検出例が少なく今後の課題であろう。しかし、広台地、岩原台地及び米野山低山地域では、弥生後期を中心に住居に伴うものと思われる土器、石器群の採集地域も点在して見つかっており、この縁辺に生活域があると考えても良い。

古墳時代では、先行する遺跡として広・諏訪原遺跡方形周溝墓群、同石棺、千田・浦大間方形周溝墓群、同石棺群、持松石棺群があり、現在、千田・浦大間古墳群として一部が現地保存を受けている。岩原台地では、極めて優美な形状を残す双子塚(全長107m前方後円墳)を主墳とする岩原古墳群が有名であるが、他に、持松塚原古墳、駄の原釜石古墳、久野古墳、早馬塚古墳、双塚古墳、堤1・2号古墳、鬼塚古墳、芹ヶ迫古墳等が残存し、墳丘を有するものは主に中期から後期にかけてのものが多く、また、横穴墓は、岩原台地の凝灰岩壁面を利用して200基以上と縁辺の浅い谷崖面に数多く開口していて代表的なものとしては、桜の上横穴墓群があり他に田代、日の口、下米野など8群が知られている。先の岩原横穴墓群をはじめとしてまだ埋

没しているものも多く全体数はさらに増加するものと思われる。

横穴墓に関しては、隣接する山鹿、菊水の他玉名市など菊池川流域全体が横穴墓群の集中地域であり、一群で400基を越える墓群もあるため確実な総数は判明していない。

奈良、平安期に至ると、これも県営圃場整備事業に伴った調査において広・西屋敷遺跡の竪穴住居跡群や、上迫遺跡、駄の原遺跡などでも住居跡群の調査が実施されている。これら一連の調査は、一部設計変更等により調査対象面積の縮小もあり全域の調査ではない。それぞれの調査で中世と見て良い掘立の柱穴列や土墳墓、祭祀関連土墳等の遺構も検出されているが、埋蔵文化財に限らず建築物とその収蔵する仏像にも優れたものが多く、霜野康平寺や米野山能満寺などは、その代表的なものと云える。また、中世域も12ヶ所が判明しているが昭和後半期の果樹園造成等により遺存良好な土塁や城跡の中心を含めて消滅状態の遺跡もあり惜しまれるところである。

注1. 昭和62年2月、現町庁舎工事に際して採集された。(町公民館所蔵)

注2. 昭和52年、県営圃場整備事業に伴う県文化課の発掘調査。

注3. 昭和34年4月、旧山鹿高校考古学部による調査で甕棺5基、同53年、県文化課による調査時に甕棺34余基、土墳墓80基が出土、検出されている。

注4. 伝鹿央町下米野出土、文献「肥後国集古兵器図證」文政13年。

注5. 注2に同、調査時に工事関連測量業者助手による採集資料(鹿央町史上巻)。

注6. 昭和30年11月、旧山鹿高校考古学部による調査で甕棺5基が出土。

注7. 昭和35年5月、旧山鹿高校考古学部による調査で合せ口甕棺1基の出土。

注8. 昭和52年11月、県営圃場整備事業に伴う県教委文化課の発掘調査、甕棺54基、木棺墓11基他が出土。

注9. 昭和52年、県教委文化課による調査、甕棺10基、木棺墓43基が検出されている。

注10. 昭和55年12月、県教委文化課による調査。

注11. 昭和35年8月、旧山鹿高校考古学部による発掘調査。

注12. 昭和33年3月、旧山鹿高校考古学部による発掘調査。同55年、県教委文化課による発掘調査で、7基の方形周溝墓が発掘された。

注13. 昭和32年3月、旧山鹿高校考古学部による発掘調査、組合せ箱式石棺など5基が出土。

注14. 昭和34年5月、旧山鹿高校考古学部による発掘調査、家形石棺3基出土。

注15. 昭和42年12月、県教委文化課試掘時に超大型の舟形又は家形の石棺が確認された。棺蓋装飾が施されており県指定となり未掘埋戻しされている。

注16. 九州縦貫道脇に残る石室残骸で、旧状を保っていない。

注17. 前方後円墳と考えられているが、現在墓地のため不明。

注18. 2基の円墳が残る、1号墳頂は石室天井石の露出が認められ横穴式石室と考えられるが、2号墳は未調査。

注19. 円墳、未調査

注20. 岩原横穴墓の対岸壁に位置し総数23基、うち4基が装飾を有する他複数構造のものも含め各地の横穴墓群に比べて形状が極めて整っている。

注21. 県教委文化課による発掘調査で竪穴住居跡11基と掘立柱建物4棟他が検出されている。

注22. 昭和52年、広下原台地の天神免遺跡南において竪穴住居跡22基他が県教委文化課にて調査された。

本稿における注は、鹿央町史上・下巻及び県教委文化課調査主任者であった桑原憲彰、緒方勉、江本直、高木正文の各氏からの御意見及び調査にあたった丸山武水(現遺跡整備計画)のメモを参考とした。



第1表 周辺遺跡一覧表

跡別	遺跡名称	種別・時代	備考
A	持松西部道路		
B	持松東部道路		
C	向原道路	集落址・甕棺群(弥生)	
D	淵訪原道路	箱式石棺群	昭和55年 県文化課調査
E	浦大間道路	方形周溝墓・石棺群	昭和55年 県文化課調査
F	中尾・早馬塚道路	甕棺・木棺墓群	昭和52年 県文化課発掘
G	吉井原道路	弥生～古墳(甕棺群・石棺)	昭和53年 県教委調査
H	駄ノ原道路	集落址(縄文～中世)	県教委調査
①	寺の上道路	古代・中世・近世	本書 第1章
②	天神免道路	弥生中～後期・中世	本書 第3章 昭和52年 県教委発掘調査地点の北側
③	向原道路	弥生後期前集落址	本書 第2章
1	下原古墳	岩原古墳群中～後期	主墳双子塚他 国指定史跡 10基以上
2	双子塚古墳		
3	塚原古墳		
4	馬不向古墳		
5	寒原古墳		
6	苦竹城跡	中世城址	
7	鬼塚古墳	円墳	未調査
8	岩原城跡	中世城址	二箇所の平地、階段状地形、堀切
9	田代城跡	中世城址	
10	権ノ城跡	中世城址	
11	持松原古墳	円墳(大型石棺)	県指定 確認のみで未調査
12	塚崎城跡	中世城址	
13	浦大間古墳群	方形周溝墓・石棺群	昭和32年 旧山鹿高校調査 5基の石棺確認
14	早馬塚古墳	甕棺・木棺墓群・円墳	未調査 付近に甕棺群
15	中尾古墳	円墳	
16	城ノ尾城跡	中世城址	
17	城尾屋敷道路	中世館址・近世集落址	1998.3 鹿央町教委報告
18	双塚古墳	円墳	横穴式石室
19	双塚古墳	円墳	未調査
20	堤古墳	円墳(横穴式石室)	昭和53年 県教委調査
21	広城跡	中世城址	
22	芹ヶ迫古墳	円墳(横穴式石室)	未調査
23	芹ヶ迫古墳	円墳(残丘)	
24	駄ノ原釜石古墳	円墳(横穴式石室)	旧状を保っていない
25	下原古墳	円墳	
26	日ノ口横穴墓群		
27	下米野横穴墓群		昭和61年 鹿央町教委調査 48基確認
28	向原横穴墓群		10基
29	田代横穴墓群		
30	城ノ前横穴墓群		

○報告遺跡・○散布地・▲古墳・■城跡

第1章 寺の上遺跡

I. 調査の組織

調査主体 鹿央町教育委員会

調査責任者 鹿央町教育委員会

教育長 東 正治

調査事務体制 鹿央町教育委員会

事務局長 中 山 知 博(前)

事務局長 井 出 昌 人(現)

係 長 坂 田 英 二(前) (調査事務)

参 事 西 林 一 弘 (本調査主任)

調査指導・助言

・熊本県教育庁・文化課

課長補佐 島 津 義 昭

課長補佐 松 本 健 郎(現熊本県立熊本聖学校教頭)

参 事 古 城 史 雄

・山鹿市立博物館

館 長 隈 昭 志

副 館 長 中 村 幸史郎

・山鹿市出土文化財管理センター

嘱 託 前 田 軍 治

調査協力者

・国立八代工業高等専門学校

教 授 佐 藤 伸 二

・別府大学・文学部史学科

助 教 授 坂 田 邦 洋

・熊本県立装飾古墳館

館 長 桑 原 憲 彰

学 芸 員 長谷部 則 和(現熊本県文化課主任学芸員)

学 芸 員 坂 口 圭太郎(現熊本県文化課文化財保護主事)

・城南町歴史民俗資料館

参 事 清 田 純 一

・鹿央町文化財保護委員会

委員長 寺 本 重 美

委員 坂 田 明 彦

調査作業員

江藤 昭代、江藤エミ子、池田須夜子、木村天授子、坂上 瑞子、輪内タツ子、
後藤 済子、城 やよい、山下ヨシ子、一 シクヨ、藤本サチ子、佐野木敬子、
川口キヌ子（以上鹿央町）

前川 誠一、江崎 和義、江崎 栄子、中尾ツユ子、松本エイコ、富田スミ子、
松本 尚子、松本 悦子、神島 愛子（以上山鹿市）

材津 幾代、福山須美子（以上鹿本町）

石川 春代（菊鹿町） 中島 仁（西合志町）

和田 賢一（菊陽町） 渡邊 耕平（熊本市）

調査補助業務（空中写真撮影含む）

（株）文化財環境整備研究所

調査報告書作成

総 括 鹿央町教育委員会

総 務 坂 田 英 二（前係長）

総 務 木 下 政 司（現係長）

主 任 西 林 一 弘（参 事）

出土資料整理・実測・製図

（有）遺跡整備計画

報告書作成指導助言

山鹿市立博物館館長	隈 昭 志
山鹿市立博物館副館長	中 村 幸史郎
山鹿市出土文化財管理センター	前 田 軍 治
九州大学大学院人文科学研究院助手	西 健一郎
長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所	安 泰 勉
別府大学史学科助教授	坂 田 邦 洋
城南町歴史民俗資料館	清 田 純 一
人吉市教育委員会	和 田 好 史
深田村教育委員会	北 川 賢一郎

Ⅱ. 調査の経過（調査日報抜粋）【寺の上遺跡】

1998年(平成10年)

1月16日

発掘調査区にて、鹿央町教育委員会坂田、西林、鹿央町役場建設課後藤氏、熊本県鹿本事務所
耕地課田尻、小柳両氏立会いのなかで、発掘調査行程、手法、その他作業事務所の設置場所、表
土剥ぎ作業等について現場打ち合わせを実施した。

1月17日

現場作業事務所設置、発掘機材搬入作業。

1月19日

表土剥ぎ。発掘区域の西側から開始。ジョレンによる荒掛けを実施。耕作土下の暗褐色土層
に遺物(陶器類)確認、ピット・土壇らしきもの数カ所確認。

1月20日

表土剥ぎ。ジョレン掛け。

1月21日

表土剥ぎ。グリッド設定(5mメッシュ)、基準点測量BM設定(80.100m)。

1月22日

調査区内掘り下げ、遺構確認作業。試掘溝内に瓦質土器(破片)を確認

1月26日

遺構位置図測量

1月27日

遺構検出作業

1月30日

縄文期の土器片を含め遺物の散布はほぼ全区に認められが遺構に直接関連しないと思われ
る資料はドット記録のうえ取り上げを行うことにした。確認済みの遺構は白線を施した。柱穴
群のなかには明らかに建物跡を想起させる並びのものがあるが現状では不明。

2月 3日

今週の作業としては、検出対象の遺構、攪乱溝を判別し、次週から各遺構検出にあたるため記録済の遺物取り上げを行った。

調査区内では、旧豊前街道と平行するように南北に通商「馬車道」と呼ばれる農道が位置しているがこの点の聴き取りも必要と思われる。

2月 4日

西側に位置した農道は縦断トレンチを入れたところ道路下面は縁辺に等しく土層の乱れは見られない。町の資料では明治初期には畑地とされており、農道は後に造られたものと思われる。

2月 5日

攪乱土のはりつきも残存し、遺構平面図確認に支障があるため、全体の清掃を徹底する必要がある。

2月10日

遺構確認作業で、単発的に検出される資料のうち、遺構面外から出土のものは記録と取り上げを行った。資料は、近世のものも混在するが全体としては中世の資料が目立ち始めた。

2月13日

調査区北西部で縄文後期の鉢の口縁部数点が出土しているが、硬化面直上レベルにあり、住居跡の可能性が考えられる。

2月17日

全区とも、畑地として圃場整備が行われているが、部分的に重機による深掘りが確認されている。この位置に関しては、攪乱として埋土の掘削をしておく必要があると判断した（農業廃棄物のビニール等が大量に混入している）。

2月20日

西側で南北に位置する農道は、排土のうえ調査対象としたため、近隣の利用農家に相談し、迂回道路の使用をお願いした。

3月 2日

土壌、柱穴等の検出を継続しながら、必要に応じた写真撮影、実測を平行して進行する。

3月 3日

県文化課から松本主幹、古城参事の来訪を受け、進捗状況の説明を行う。

3月 4日

山鹿市立博物館の隈館長、県立装飾古墳館から坂口、長谷部両学芸員の来訪を受ける。隈館長から、検出中の中世土壌群の中には祭祀に関連したものが類例であるので、注意点などの指導を受ける。

3月12日

現場撤収

Ⅲ. 調査の概要

下原地区と元広地区の間に菊池川支流の岩原川が北に向かって小さな流れを作り出し、寺の上遺跡はその右岩台地端に位置し調査区の西では旧豊前街道が南北に走る。街道の五里塚は遺跡の北側に現在も残っている。

遺跡の東側は急な谷部が形成されこの谷を挟んで直線距離にして300m東に先に調査・報告を終了した城尾屋敷遺跡がある。

調査対称面積は広域農道計画上からは1600㎡とされたが隣接する広地区果実集・出荷場のアスファルト敷地に広がり事実上の調査は1000㎡であった。この面積には西側にあった農道の通行を一時迂回して頂いて調査区に組み入れた区域を含んでいる。

調査にあたっては対象区が豊前街道添いにある事、又縁辺遺跡の分布から見て古くは弥生、新しい時期では近世までの遺構・遺物の検出が予測されたが、前年の試掘では中世の遺物と土¹²壌状遺構が確認されていた。

鹿央町では先の城尾屋敷遺跡調査時から座標軸に合わせて真北線を基軸としたグリッド設定での調査を方向付け、当遺跡では10mグリッドを大グリッドとしさらに5m間の杭で4分割の上調査を実施した。

調査の結果検出された遺構・遺物は大別すると古い順から縄文後～晩期に伴う可能性もある硬化面と土器、弥生期では一括取上遺物中に後期後半土器破片少量があるが遺構に伴っての出土でなく縁辺からの流れ込みとみられる。

時期は不明ながら遺構としては西側1/2強の範囲内で柱穴及柱穴列、土壌及び土壌墓と思われる掘り込み、また東側1/2において南北方向の3本の溝と東西方向に2本の溝が見つかった。古墳や集落跡の調査と違い寺の上遺跡で検出された遺構は性格不明のものが多く、他に掘立構造を想起させる柱穴列、硬化面が直線的に延びる道路上遺構も検出されたが遺物の出土量も

全体的に少量で遺構を伴ったものとしては土壌内の瓦質土器、土師皿、溝からの瓦質土器(壺、搦鉢、火舎)、青磁碗破片などに限られた。

注1 1998.3. 城尾屋敷遺跡(広域推定値) 鹿央町教育委員会報告

注2 平成9年 県教委文化課 鹿央町教育委員会試掘

(1) 遺溝

イ、柵列(第5図)

C-2G北寄りの地点から東西線に沿って計19個の小ピットが直線上に並んで検出された。西側のピットを基点として19個目までの距離は14.5mを計るが、この柱列が調査区外に続く可能性もある。各柱穴間は0.7m~1.0mの間隔がある。直線上に並んでいたことから柵列として扱っているが他遺構との関連が不明である。C-3G北東寄りの長方形に柱穴列を構成する掘立状建物を想起させる遺構もあるが相互における関連も不明である。

柱穴は上面削平がない場合それぞれの規模は20~25cmの直径で掘り方はほぼ垂直に深さは浅いもので7~8cm、深いものは40cmを測る。

深いピットはともかく浅いものを柱穴とするには難点があり、上面削平があった場合はその限りでない。埋土内の出土遺物は土師質土器細片しかなく判断材料に乏しい。

ロ、掘立柱跡(第5図)

C-3G東寄りの位置ではほとと合いに2.7m(1.5間)間に5個と南北方向の3~7(約2間)m間に5個のピットが検出された。平面上にみる並びは整っていて何らかの建築物を考えさせるが、いずれも10~17cmと浅いピットであり確実性に欠ける。

この点では東西方向に並ぶピット列と同じ状況を示している。

寺の上遺跡ではこのピット列を境にして西側には小ピット群の検出はほとんど見られなと言って良い。

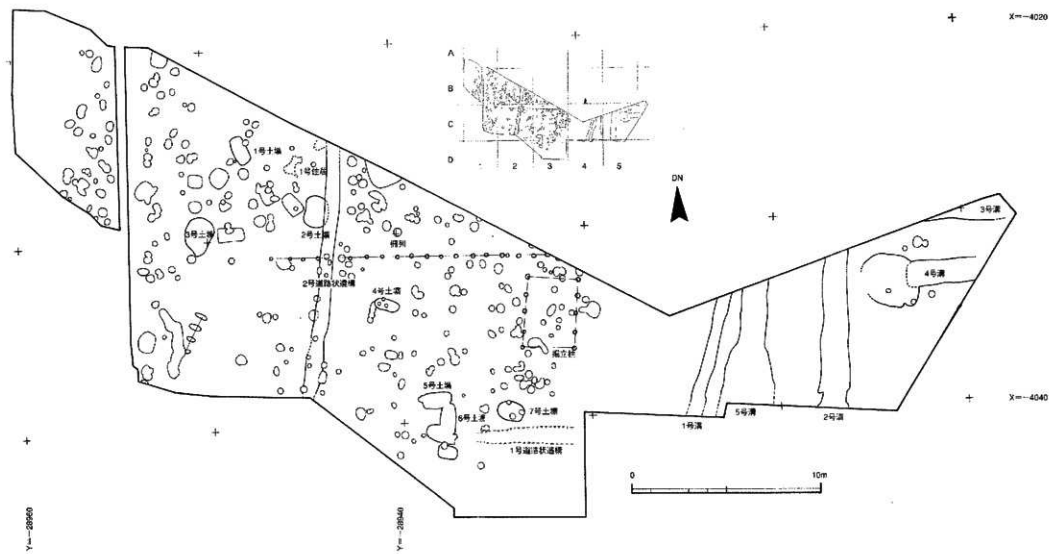
ハ、土壌(第7図~第8図)

調査区西側に集中して10基以上の土壌が平面で確認された。発掘の過程で掘り込みが極度に浅かったものや、低地に溜まった泥土状堆積のものは除外した。

1号土壌(第7図(1))

B-2G西寄りの位置で検出された。

主軸方位は北からやや西に傾いている。長径1.52m、短径0.72mの隅丸長方形を呈し、掘り方は斜めに深さは0.32mと規模は大きくない。他遺構との切り合いはピットが西に1個見られる



第4図 寺の上遺跡グリッド設定図関連構位置図

程度である。形状から見て中世以降の土墳墓に類似するものがあるが確定要素に欠ける。

2号土墳(第8図)

B-2G南寄りに検出された遺構で主軸方位は北からやや西に傾いている。平面形はほぼ楕円で長径1.56m、短径1.27m、深さ0.8mを測る。

掘削開始後より埋土中から大小の礫が多く出土し主に凝灰岩片、安山岩であった。測図中に埋土断面を示したが、人為的に埋戻した土が自然に沈下した形跡があり下層の土は地山土と見て良い。2号土墳の西側では東西に走る道路上遺構が切り合っている。

人骨、又は副葬品の出土もなく断言は出来ないが中世以降の土墳墓との見方ができる遺構である。

3号土墳(第8図)

遺構平面はB-1G、C-1Gに含まれるが一部はB-2Gにかかる。平面形状は不整楕円形であるが、ピット等の切り合いもあり本来は隅丸方形の可能性が高い。この場合長径は1.45m、短径1.0mとなり主軸方位はほぼ南北をとる。掘り方は西壁は斜め、東壁はほぼ垂直であった。埋土は最下層土が地山土に近い土質で断面に見られるレンズ状堆積から見て埋戻された土が沈下した様に思われる。埋土中から瓦質土器片数点が出土している。

4号土墳(第7図 右上)

C-2G最東部に検出された。他の土墳に比較して最も小さい。主軸はほぼ東西方位をとり長径1.4m、短径0.57m、深さ0.25mを測る。

平面は楕円形で掘込みは東壁のみ垂直、他はやや斜めである。埋土は大きく分けて2層で大小の礫が混入していた。

5号土墳(第7図 右下)

C-3G西側において隣接して4基の土墳が検出され、それぞれが切り合い関係にある中で最後に掘られた土墳である。

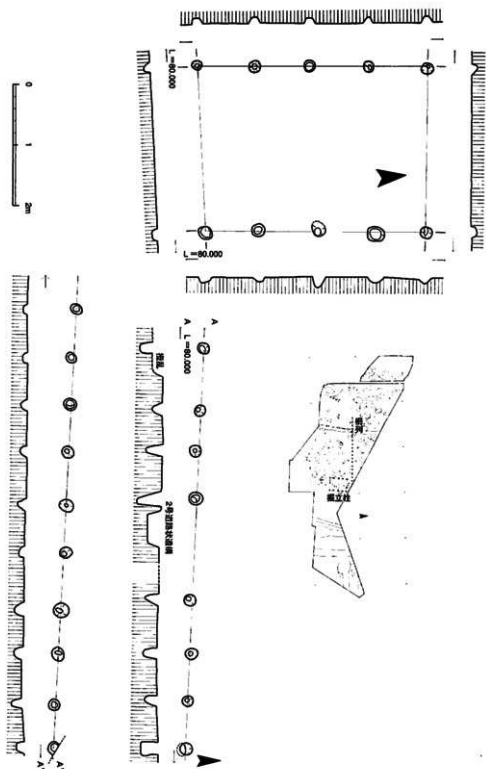
6号土(第7図 右下)

北西側コーナーを5号土墳に切られているがほぼ全容が検出された。長径1.74m、短径0.87m、深さ0.57mで主軸は北からやや東に傾いて形状は隅丸長方形プランをとり、床面は平坦である。

埋土は3層に区分されたが、上層は炭化物を含み、下層は粘質土の混入が多く人為的埋戻しが考えられる土墳である。埋土中からは土師質土器細片や瓦質土器片が少量出土し、他の土墳群との時間的差異はあまりないと思われる。

7号土墳(第8図)

D-3G北寄りで切り合いながら検出された5基の土墳の中で最も南側に位置しており全調査区の中でこの遺構より南に検出された遺構はなかった。



第5図 寺の上遺跡棚列・掘立柱跡実測図

規模は長径1.33m、短径1.03m、深さ0.27mと比較的小規模である。主軸は東西方向からやや北に振れている。床面形状が平坦な点及び埋土状況、出土遺物などから見て他の土坑と同じ性格を持つと考えられる。プラン確認時において3個のピットが重複又は切り合っていたがいずれも浅く土坑床面まで届くものではなく特に関連は認められない。

二、溝

調査東側C-4・5Gで計5本の溝状遺構を検出した。遺構Noは確認～検出の順としている。このうち1号、5号、2号としたものは方向がほぼ南北を向き、4号・5号とした溝は東西方向をとり90°の差異がある。

各遺構に切り合いはないがいずれも一部の検出に過ぎず全容は不明である。

1号溝(第6図 上)

主軸方向は北からやや西に振れている。幅は上場で0.8m、下場は0.2m～0.37mと多少差を有し、深さは0.5m、全長6.0mを測る。溝断面は逆台形状を示し底部は平坦だが検出された中央部では巾37cmの高まりが見られ北側ではさらに段落ちを形成している。底部のレベル差はさほどなく部分的に数cmの高低差があるものの傾きはない。東西方向の3本の溝の中では最も高い位置にあり底面レベルも高い。

5号溝(第6図 中)

1号溝に平行して検出された。平面形状は南側で広いが肩口の崩壊又は他の遺構によって本来の溝上場が広がったとも考えられる。

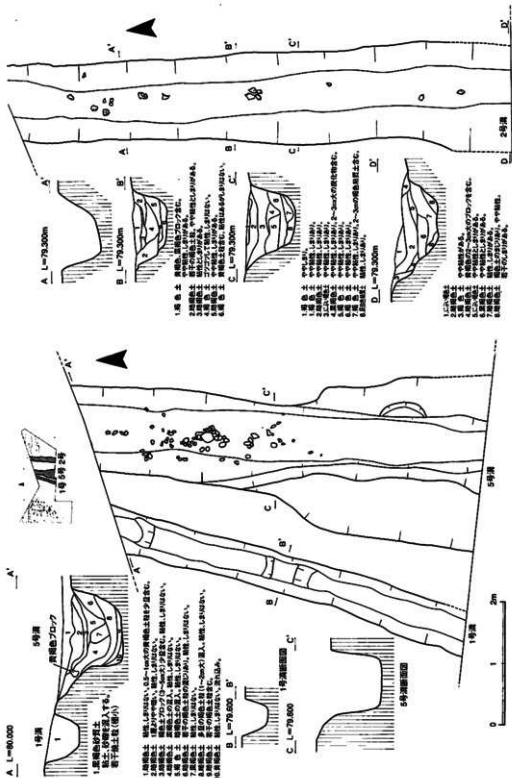
比較的遺存状態の良い位置では、巾1.45m、深さは1.0mを測る。検出された全長は6.50mであった。溝断面はコの字型を呈し底部レベルは南から北に傾斜が見られ最大値29cm程の高低差を有していることから、北に向けての流れが考えられる。底部はほぼ平らで埋土中からは中世瓦質土器片少量と大小の礫が出土している。

2号溝(第6図 下)

5号溝の西側で平行して検出された溝で設定された調査区割の影響もあるが8.20mと最も長く検出されている。平均的な巾は1.50mで北側に向けてやや狭くなり約30cmの差がある。断面形は部分的に違い浅い逆台形から中央部では深く北側に至って浅い逆台形を呈していた。

底部の高低差は北で高く最南端部とは23.5cmの差を有している。

埋土内からは瓦質土器を中心に土師坏、弥生後期の甕破片などが出土した。主なものとして瓦質土器の壺口縁、火舎脚、播鉢、青磁碗破片がある。南北に向けた1号、5号、2号の各溝は出土遺物の年代に開きがなくむしろ同年代にあり共通の目的で掘られたと考えられるが、溝に切り合いや重複が見られず同時に存在していたか、あるいはそれぞれに前後関係があったかは判断出来ない。



第6図 寺の上通跡1・2・5溝実測図

3-4号溝

C-5Gで検出された遺構で3号溝としたものは調査区外との境界に位置し主軸が東西に向くと思われたものの溝になるかどうか部分検出の為不明であった。

また4号溝としたものは方向として東西に軸をとるが土壌と切り合って止まって検出された。土壌床面と溝の底部では溝の方が70cm程低く単純に見れば土壌に溜まる水を溝に流した様にも考えられる。

溝の巾では1.20m、断面形は逆台形で南北向きの1、2、5号溝の形状では類似していた。

埋土中からは瓦質土器片、青磁細片、礫少量が出土している。中世の遺構と見てよいこれらの溝と、西側一帯の土壌及び土壌墓と見られる遺構群との関連も把握できない。

ホ、道路状遺構(第3図)

2ヶ所で確認された遺構で直線に続く硬化面から人為的に一定期間踏み込められたものと考え道路状遺構として取り扱った。

1号道路状遺構

D-3G全区の中では南側の調査区外に接して巾50～90cm、全長5.0m、方向は東西線に沿っていた。この遺構の東延長線は調査区外の為不明であるが、西側は5基の土壌群の手前1.2mで終わっている。硬化面の巾は東で88cm西では55cmと狭くなり東西での高低差はなかった。硬化面は竪穴住居跡床面に多く見られる状況に等しく、この遺構に伴うと見られる遺物はなかった。

2号道路状遺構

C-2～B-2Gにかけてほぼ南北方向に延びる硬化面を2号道路状遺構とした。1号遺構との差異は方向と、断面において逆台形に掘下がった面が硬化している点である。

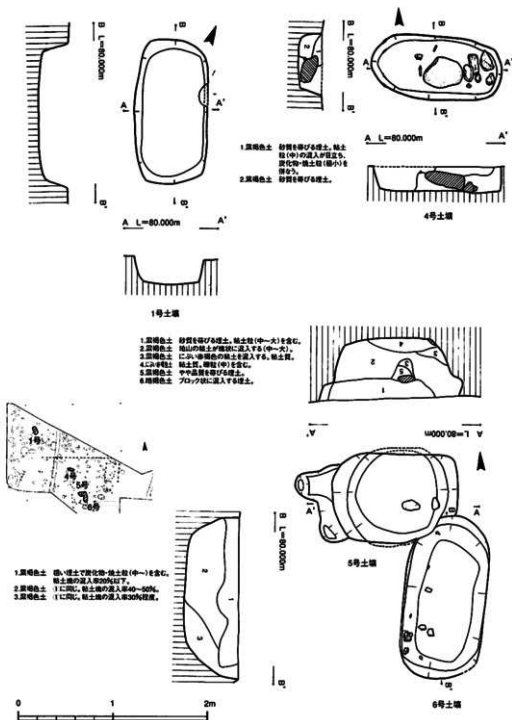
巾は上面では80cm程度で一定し底部硬化面は巾35～50cmとやや巾の違いがある。

硬化面の高低差は北と南ではやや北側が高く、遺構中央部分が最も高く全体としては北から南に向けて幾分下りと見て良い。

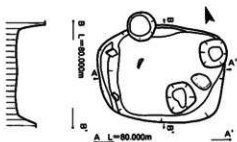
2号道路状遺構にはビット群の重複と、土壌とに切り合いがあるが、この遺構性格を把握する材料は乏しい。検出した長さは13mで南北の調査区外に延びている可能性を残している。

ハ、住居址(第3図)

B-2G中央部、調査区外との境界に近い位置で平面的に硬化した広がり2ヶ所を確認した。近年までの耕作と地表から浅いレベルでの検出であり竪穴の掘り込み等遺構も他にない事から見て住居跡硬化面とは云えない。同一レベルと一括資料中に縄文早期の押型文、及

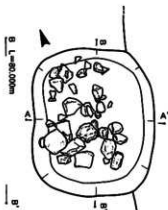


第7図 寺の上遺跡土坑実測図(1)

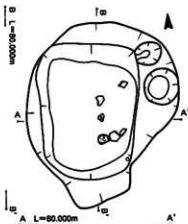
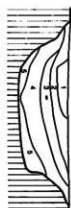


7号土堀

1. 褐色土 粘粒、しびれはない。
2. 褐色土 粘粒、しびれはない。若干の黄褐色土粒と炭化物混入。
3. 暗褐色土 粘粒、しびれはない。若干の黄褐色土粒(1~2mm)含む。
4. 褐色土 黄褐色粘質土(1~2mm)20%含む。
5. 暗褐色土 若干の粘土と黄褐色土粒(0.5~2mm)を含む。
6. 暗褐色土 5層よりやや細かい。若干の粘粒としびれがある。
7. 暗褐色土 黄褐色土粒(1~2mm)を含む。
8. 暗褐色土 炭化物とそれに伴う粘土が多く含まれる。
9. 暗褐色土 若干の暗褐色土が混じり、2~3mm程度の塊も多く含む。
10. 褐色土 粘粒と若干のしびれがある。黄褐色粘質土(2~3mm)多く含む。



2号土堀

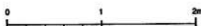


2号土堀

1. 暗褐色土 砂質を帯び、炭化物、粘土粒(中)を含む。
2. 暗褐色土 砂質を帯びた遺土。
3. 暗褐色土 炭灰質、礫片、炭物を含む。
4. 暗褐色土 砂質を帯びた遺土と粘土とがブロック状に混入する。
5. 暗褐色土 地山と同質の粘土層(中)がブロック状に混入する。



3号土堀



第8図 寺の上遺跡土壌実測図(2)

び後～晩期の黒色研磨土器片が出土しているが硬化面に伴う確証がなく参考地点として考えたい。

注1 1999.3 城尾屋敷遺跡(広域推定地) 鹿央町教育委員会

注2 平成8年 県教委文化課 鹿央町教育委員会試掘

(2) 遺物

2号溝出土遺物(第9図 1～8)

9-1 瓦質土器、広口壺(口縁部のみ $\frac{1}{4}$ 残)

口径15.6cm、胎土一きめ細かで細砂粒少量を含む。焼成一ややあまい。色調-2.5Y7/2灰黄色。

器面荒しているが内外面に2種類のハケ目調整痕を残している。

9-2 瓦質土器、広口壺(口縁～肩口破片)

胎土一白色砂粒少量を含む。焼成一普通。色調一内5Y5/3灰オリーブ、表-2.5GY5/1オリーブ灰。

器表に格子叩き痕がわずかに残る。回転ナデ仕上げ。頸部内側に横方向の指ナデ痕が見られる。口縁部内側の摩耗は使用で生じたものか。

9-3 瓦質土器 播鉢(底部破片 $\frac{1}{2}$ 弱残)

底部径14.0cm。胎土一微細。焼成一比較的良好。色調一内7.5YR6/3にぶい橙、表一灰～灰黄色。

播溝は下から上に向けて8条単位、内底部も中心から外に向けて施条、底部から立上り位置に使用による摩耗が見られる。

9-4 瓦質土器 火舎脚部

胎土一精選され微細。焼成一普通。色調-5Y4/1灰。

整形はナデ仕上げ。

9-5 瓦質土器 火舎底部破片

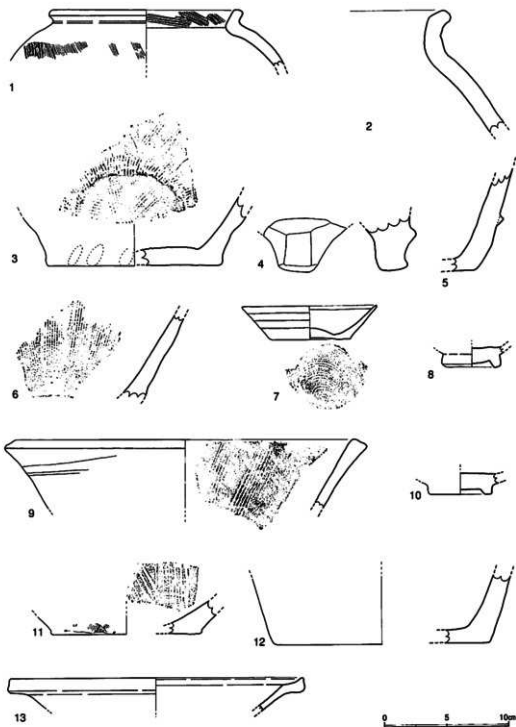
胎土一白色砂粒微量と赤色土粒少量を含むが微細。焼成一普通。色調一表7.5YR5/3にぶい褐色、内暗灰～灰褐色。

内外共に横ナデ仕上げ。

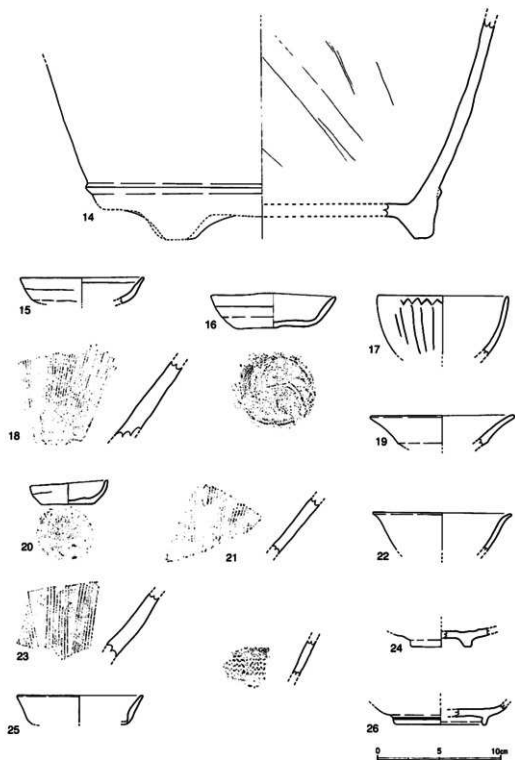
9-6 瓦質土器 播鉢体下部破片

胎土一白色小石3～5mm。器高2.7cm。胎土一微細。焼成一普通。色調-2.5YR6/4にぶい橙。

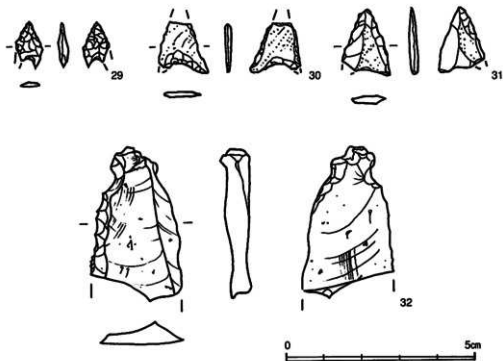
内外面共に水引仕上げ。底部糸切底。



第9図 寺の上遺跡出土遺物実測図(1)



第10図 寺の上遺跡出土遺物実測図(2)



第11図 寺の上遺跡出土遺物実測図(3)

9-8 青磁碗(高台破片)

高台径4.6cm。磁胎一精選されている。焼成一良。色調一内10Yオリーブ灰。

高台内は露胎であるが釉ダレしている。

5号溝出土遺物(第9図 9~13)

9-9 瓦質土器 播鉢(口縁破片 $\frac{1}{8}$ 残)

口径29.0cm。胎土一白色砂粒少量の他微細砂粒を多く含む。焼成一普通。色調一内外共に2.5Y7/2灰黄色。

器表は回転水引き仕上げ。内面一右手前方向のハケ目調整後8条の播溝を下から上に向けて口縁端部まで施条している。

9-10 青磁碗(高台部)

高台径5.0cm。磁胎一 1×2 mm大の小石を含む。焼成一普通。色調一10Y5/2オリーブ灰。

高台内まで釉ダレ。見込部には一部露胎を残す。

9-11 瓦質土器(播鉢底部破片 $\frac{1}{8}$ 残)

底部径12.0cm。胎土一白色小石微量。焼成一良。色調一表7.5Y5/1灰、内暗灰色。

揺溝は6条で溝間の巾が広い。施条前に器形に合わせて回転ハケ目調整痕が明瞭に残る。

9-12 瓦質土器(甕底部破片 1/6強残)

底部径17.4cm。胎土一白色砂粒微量。焼成一普通。色調一内7.5Y 6/1灰、表N 4/灰。

器表はわずかに格子叩き目を残すがなめらかにナデ仕上げされ光沢がある。

9-13 青磁(鉢 1/4残)

口径22.6cm。磁胎一精選されている。焼成一良。色調一7.5G Y 5/1緑灰色。釉厚は0.5~0.1mm。

9号土壌出土遺物(第10図 14・20・23)

10-14 瓦質土器、火舎(底部から胴部下が残存)。底部径26.0cm。支脚1は欠失。支脚上部に三角貼付突帯1条。

比較的深めの器形か。胎土一微砂粒を含む。焼成一普通。色調一2.5Y R 4/4にぶい赤褐色。

器面は焼成前の研磨により光沢がある。二次的に火を受けて煤の付着がある。

10-20 土師坏完形

土壌上面からの出土。口径6.0~6.3cm。器高1.5~1.9cm。底部径4.4~4.7といびつ。内外面共に水引仕上げ。底部糸切底。

胎土一細砂粒を多く含む。焼成一普通。色調一7.5Y R 6/4にぶい橙色。

10-23 瓦質土器(播鉢破片)

胎土一白色砂粒少量を含む。焼成一良。固く焼きしまっている。色調一N 5/灰。

揺溝は下から上に7条で施条前のハケ調整痕を残している。

10-15 土師坏(口縁部破片)3号土壌出土

口径10.0cm。器高は2.5cm内か。

胎土一細砂粒少量を含む。焼成一普通。色調一5Y R 6/4にぶい橙。内外面に二次的な煤の付着。

10-16 土師杯 完形

P 90より出土。口径10.1~10.4cm。器高2.5~2.9cm。底部径6.0cm。胎土一微細。焼成一焼むらあり。色調一10Y R 6/6明黄褐色。

器形はいびつ。器表にロクロ整形痕。内面は水引きのあとナデ仕上げ。外底部は糸切り底。

10-17 青磁碗破片 1/6残。一括資料。

口径10.5cm。磁胎一白、淡褐色の微粒子を含む。焼成一良。釉発色一淡緑灰色。釉厚一1.5~0.6mm。

器表蓮弁は簡素化されたヘラ描き。

10-19 青磁皿破片 1/6弱残

口径11.7cm。磁胎一白色微砂粒少量を含む。焼成一良。色調一7.5Y R 6/1緑灰。発色は普通。

釉厚—0.5mm。

10-21 瓦質土器 播鉢破片 一括資料

胎土—微砂粒焦慮を含む。焼成—普通。色調—内外10Y4/1灰。

比較的に肉薄。器表では指圧痕を残す。播溝は下から上に向けて8条。

10-22 青磁碗口縁部 破片 $\frac{1}{4}$ 残 一括資料

口径11.2cm。

小破片の為器形がやや不明高台付の皿の可能性もある。

10-24 肥前陶器 皿底部破片 $\frac{1}{4}$ 残 一括

高台形4.8cm。陶土—2.5Y6/2灰黄色。焼成—焼きしまっている。

緑釉。蛇の目釉ハギ高台内はヘラ切り。

10-26 染付皿破片 一括資料

磁胎—微細な空洞あり。焼成—良。高台内露胎。畳付近くに砂目地痕を残す。

10-27 縄文早期 押型文土器破片 一括

10-28 縄文後期 北久根山系鉢口縁 一括

Ⅳ まとめ

本遺跡の調査は、鹿央町における埋蔵文化財の質と量、過去に報告されている縁辺遺跡の歴史的重要性、及び旧豊前街道沿線に面し、かつ広区に存在する寺院の直上に位置することから工事対象区間内の試掘が実施され、その結果に基づいて調査が計画、実施の運びとなったものである。幸い道路により消滅する寺の上遺跡では保存対象とされるような重要遺構、遺物の検出はなく前述の遺構類とわずかな出土資料に限られ調査を終了した。

しかしこの中で中世の土壌及び土壌墓と思われる遺構の検出と、同じ時期と見て良い溝はその性格を知る上でひとつの情報をもたらした。調査区が面と云うより線に近いことから全容を知る上で限界があり、この点は今後周辺の踏査や別の機会においての再調査により不足情報の積み上げがなされる中で解明していかなければならない。

今回の調査において縄文での土器、中世の遺構と遺物の他時期設定の決め手のない土壌、ピット群を検出したが中世末からの城跡・館跡と思われる遺構が近場に残ることからこれらの遺跡群との関連が最も課題として考えられる。この先広域農道予定区間内では別の遺跡も調査が予定されている事もありその際改めて広範な情報収集とより綿密な調査を実施して成果を集合、分析する作業に期待したい。

第2章 向原遺跡

I. 調査の組織

調査主体 鹿央町教育委員会

調査責任者 鹿央町教育委員会

教 育 長 東 正治

調査事務体制 鹿央町教育委員会

事務局長 中 山 知 博(前)

事務局長 井 出 昌 人(現)

係 長 坂 田 英 二(前) (調査事務)

参 事 西 林 一 弘 (本調査主任)

調査指導・助言

・熊本県教育庁・文化課

課長補佐 島 津 義 昭

課長補佐 松 本 健 郎(現熊本県立熊本聾学校教頭)

参 事 古 城 史 雄

・山鹿市立博物館

館 長 隈 昭 志

副 館 長 中 村 幸史郎

・山鹿市出土文化財管理センター

嘱 託 前 田 軍 治

調査協力者

・国立八代工業高等専門学校

教 授 佐 藤 伸 二

・別府大学・文学部史学科

助 教 授 坂 田 邦 洋

・熊本県立装飾古墳館

館 長 桑 原 憲 彰

学 芸 員 坂 口 圭太郎(現熊本県文化課文化財保護主事)

・城南町歴史民俗資料館

参 事 清 田 純 一

・鹿央町文化財保護委員会

委員長 寺 本 重 美

委員 坂 田 明 彦

調査作業員

江藤 昭代、江藤エミ子、池田須夜子、木村天授子、坂上 瑞子、輪内タツ子、
後藤 済子、城 やよい、山下ヨシ子、一 シクヨ、藤本サチ子、佐野木敬子、
川口キヌ子（以上鹿央町）

前川 誠一、江崎 和義、江崎 栄子、中尾ツユ子、松本エイコ、富田スミ子、
松本 尚子、松本 悦子、稗島 愛子（以上山鹿市）

材津 幾代、福山須美子（以上鹿本町）

石川 春代（菊鹿町） 中島 仁（西合志町）

和田 賢一（菊陽町） 渡邊 耕平（熊本市）

調査補助業務（空中写真撮影含む）

（株）文化財環境整備研究所

調査報告書作成

総 括 鹿央町教育委員会

総 務 坂 田 英 二（前係長）

総 務 木 下 政 司（現係長）

主 任 西 林 一 弘（参 事）

出土資料整理・実測・製図

（有）遺跡整備計画

報告書作成指導助言

山鹿市立博物館館長

山鹿市立博物館副館長

山鹿市出土文化財管理センター

九州大学大学院人文科学研究院助手

長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所

別府大学史学科助教授

熊本県文化課主幹

城南町歴史民俗資料館

人吉市教育委員会

深田村教育委員会

隈 昭 志

中 村 幸史郎

前 田 軍 治

西 健一郎

安 楽 勉

坂 田 邦 洋

高 木 正 文

清 田 純 一

和 田 好 史

北 川 賢一郎

Ⅱ. 調査の経過（調査日報抜粋）【向原遺跡】

1998年(平成10年)

7月10日

発掘調査区域が、耕作地と既存農道を分断するかたちになるため、周辺耕作者と農作業用の連絡路の確保と発掘調査行程の調整のため打ち合わせを実施

7月21日

現場仮設事務所設置位置の確定、表土剥ぎ重機の導入日程などについて、町教育委員会、関係各業者との現場での打ち合わせを実施、又、隣接の町福祉センター春田所長と水道利用等について相談し、許可を得る。実質調査業務として、基準点踏査と水準測量に着手し仮BM設置までを終了した。

7月27日

県文化課の試掘結果報告を資料として、調査区域西側から表土剥ぎを開始した。

7月28日

調査区域を明確にするため、調査範囲にテープ張りを行う。表土剥ぎは、旧耕作土について排土しているが深さ30cm前後で弥生後期の土器片が点々と確認され始めた。

7月29日

調査区西北側に位置する町福祉センター敷地内に双塚古墳(円墳2基)が残存するが、今回の調査全図に含めるため位置測量と墳形現況図作成を行った。

7月30日

耕作中の畑地が分断されるため調査区域のほぼ中央に幅3mを農作業路として設ける。

8月 3日

重機による表土剥ぎを終了。作業員を入れ西側から浮土排土を開始する。

8月 5日

メッシュ杭設置作業を実施しグリッドを設定する。調査区が縦長(長辺115m)で西から東方向に勾配があるためBM杭は3地点に設置した。

8月 6日

調査区西端から15m地点で弥生後期の土器群が集中して出土しはじめた。遺構に関連しての出土と見られる。地形的には東側に向けて傾斜しているが住居址であればその範囲を示す環濠等の遺構も考えられるので確認作業は慎重に進める必要がある。

8月 7日

昨日の弥生後期土器群に近い位置で住居跡の床面を想起させる硬化面があり竪穴住居の一部の可能性が高い。但し、上面が耕作等の削平を受けているため、まだ壁部分の確認には至っていない。

8月12日

中央に設けていた仮設農道より西側での遺構検出を終了した。約650㎡内の遺構数は、比較的少なく溝1、土城4、弥生後期の住居跡その他柱穴群と不明遺構1を数えた。農道より東側の状況も同様で遺構はさほど多くないと考えられる。現在の段階では、住居跡を含む遺跡の広がり不明である。

8月17日

中央仮設農道を挟んで西側は方形プランの竪穴住居跡1基と、ほぼ壁部を喪失した竪穴住居2基は判明した。この位置の縁辺では縄文後期の鉢口縁等の散布も多くこの時期の遺構上に弥生竪穴が営まれた可能性もある。

8月18日

調査区内最西部に位置するSH-02(1号住居)から県北一帯には見られない弥生土器が数点混入している点に気付いた。山鹿市博物館長の中村氏と前田氏の来訪があり、資料の検分を頂いたが山鹿市方保田東原遺跡の出土品にもないとの事で、興味深いところである。

8月20日

別府大学・坂田助教授と菊水町教育委員会・益永氏の来訪を受けた。

検出済住居内出土の土器は、破砕後に二次的な火熱を受けていて使用による煤付着の他、全

く色調変化の著しい土器片に接合する他の土器片があることから火災を生じた竪穴住居と見る事が出来る。

8月25日

仮設農道西側では柱穴群の他新たな遺構の確認もないが、東側に作業を移す前の再確認を行った。

8月28日

調査の進行をはかるため作業員の増員を行う。委託している測図や写真撮影等も2班6名体制で進めている。

9月 1日

作業員を増員しての調査を進める。このペースで進行すれば今月中の終了も望めそうである。

9月 2日

調査区南側の耕作者の高山氏の御好意で水を分けて頂き遺構確認作業のための散水を行った。

9月 3日

委託の測図等人員を更に8名に増員して、測図化体制の充実をはかった。

9月 7日

東側B C-9グリッドの長方形プランの遺構は竪穴住居とみられる。本遺跡の弥生後期の住居跡は、出土する土器群から見て後期前半の遺構と見られ、平面形はいくぶん方形に近い形状である。ただ、S H-10(住居跡)は後期末の長方形プランを呈しているものの出土資料が少なく、遺構総数が多くないため結論付けは避けたい。

9月10日

調査範囲にありながら耕作物のため、一部残っていた西側B-3グリッドを人力で掘削を行う。この位置は、上面削平のため平面形が把握できずにいた住居跡にかかっているため慎重に作業を行う。

9月14日

西側で不明遺構、又は土城として記録中の遺構は樹木痕の可能性も残しているが、最終判断は完全に半裁した後に結論を出す旨、山鹿市博・中村副館長からの助言をもらう。

9月19日

調査も最終段階を迎えた。部分的に遺構検出を実施し、測図化、写真撮影も平行して進めている。山鹿市博の隈館長の指導を受け、向原遺跡は弥生中期後葉～後期前葉に位置づけられるであろうとの指摘を頂く。

9月25日

東側約500㎡の遺構測図化作業。

9月28日

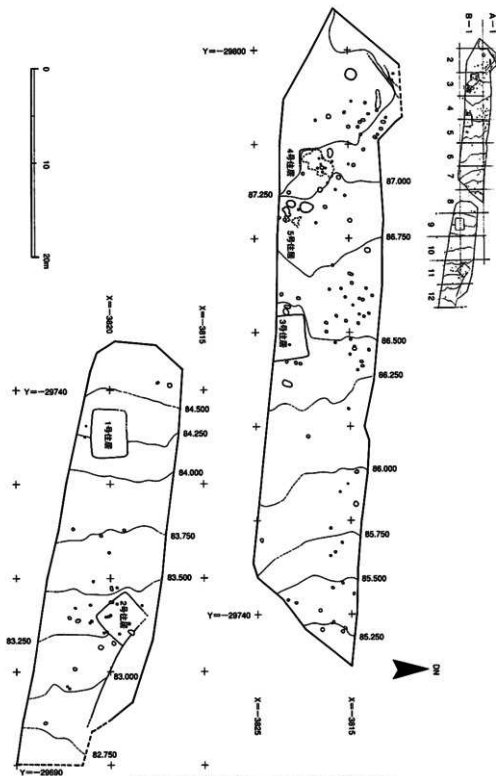
空撮前準備として全体清掃を実施。

9月29日

空中写真撮影実施。土、日の雨で極度の乾燥もなく、空中写真撮影には好都合の条件となった。

9月30日

現場撤収作業。



第12図 向原遺跡グリッド設定図・同遺構位置図

Ⅲ. 調査の概要

広・向原遺跡の調査は開始より実質57日間現場作業を実施した。調査は道路工事によって掘り下げられる巾11m、直線距離で約115m、面積は1265㎡が想定されたが一部耕作中の畑を分断する事から仮農道を設けた部分を除いて全て発掘を行った。

調査は西側から東に向けて重機による表土剥ぎとトラック輸送による排土を行った。調査対象面積の広さに対して確認された意向は竪穴住居跡3基と、プラン不明の住居跡と思われる2地点の他、性格不明の土城5～6ヶ所と柱穴群を検出したにすぎない。ただし赤ホヤ層直上面からの縄文後～晩期の土器と石器出土もあり縄文期の遺構検出を考えて精査した。

地形は西から東に向けての傾斜と南から北に向けても緩やかな傾斜があり前者では対象区内4.25mの比高差がある。数値的には海拔87.250mからの下りで北に向けては数値的にはわずかな差である。

道路用地の為縦長の調査区設定となり、東西方向の広がりはある程度把握されるが南北方向は遺跡の範囲がつかめなかった。最西部端より天神免遺跡は直線上に位置し、その距離は280mと近く、昭和52年の県教委文化課による広範な調査区が東南域一帯に広がる事を考えれば弥生中期に始まる後期末までの遺跡として見た方が良い。

今回の調査区から南60m地点は海拔94m前後で比高差は7m近くあり集落後としては南斜面方向に広がる可能性も高い。しかし一帯の表面採集では北斜面からの遺物採集もあり、流れ込みを考慮しても遺跡の範囲は広がると思われる。遺構総数から見て集落の端部に位置している結果なのか、又弥生後期前半に置かれる当遺跡の状況が地域的特性を持つのか推測の域を出ないが、菊池川小支流の岩原川を挟む2つの台地上に実に多くの弥生期を代表する遺跡が集中している事実は、今日までの調査資料をまとめると県内での同期遺跡・遺構の中でもトップレベルにある事は間違いない。

(1) 遺構

1号住居跡

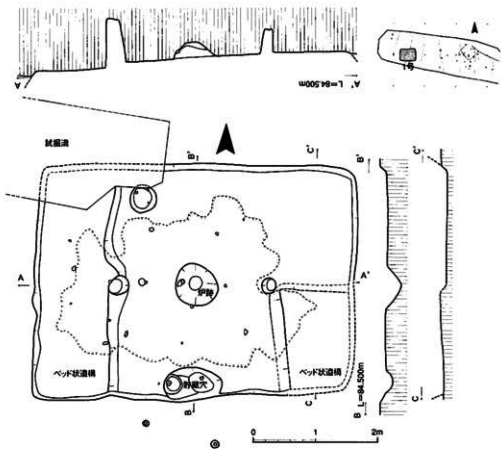
調査区やや東寄りのB-9GとC-9A境界線上で検出した遺構でこの東15m地点で2号住居跡が検出されている。

全体に遺構密度が低く切り合い、重複はみられない。遺構規模は長径5.10m、短径3.76mを測り隅丸長方形プランを呈している。

北西のコーナー部は試掘調査時の掘削溝で欠失し、南東コーナー部は竪穴掘り込みの壁部が確認出来なかったが全体としては遺存状態の良い住居跡と云える。

主軸方位は主柱穴と炉跡を結んだ点の計測でN-90°-Wでほぼ東西線上をとる。

2号住居跡の検出された地形は西から東に向けて傾斜している地点にあり床面も又同方



第13図 向原遺跡1号竪穴住居跡実測図

向に4°傾いていた。

遺構の特徴として西側では巾1.10mのベッド状の高まりが設けられ短辺径に添って造り出されていたと見て良い。また西南隅においても0.9～1.10mの段を設けている。

このベッド状遺構と床面の比高差は約10cm内外で極度に高い状態は示さない。

住居跡中央部は炉跡で支柱穴は炉跡を挟んで2個が2.45mの間に設けられていた。

遺構内南側壁面の掘込みは貯蔵用ビットと考えられるが床面から約10cm強とさほど深くはない。他に北東寄りにビット1個を検出しているが補助柱痕とも考えられるが確定要素に欠ける。床面上は炉跡を中心に主な生活面であつたらしく硬化面が広がりベッド状遺構上にも広がりをを見せていた。

1号住居跡の留意点として南側竪穴外のフラット面において2個の小ビットを検出したがややズレがあるもののビット間は1.20mを測りこの住居跡の入口部を構成した柱穴として考えることが出来る。この場合貯蔵穴上を板状段梯子で竪穴内に降りたことも考慮され、か

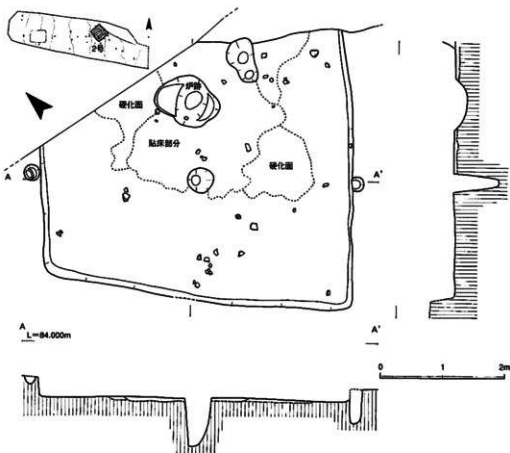
つ長方形プランの平入り形態をとる例として興味深い。また東、西の要部分での入口を想定して確認を行ったが柱穴、硬化面等は見つからなかった。この住居跡の出土遺物は少なく甕、高坏、器台の小破片の他わずかな細片に限られている。

2号住居跡

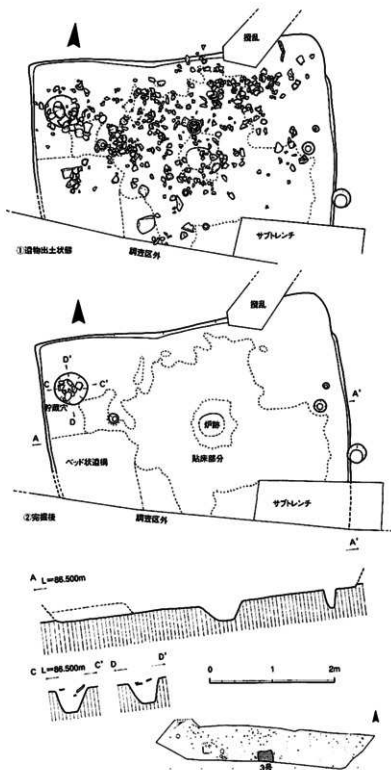
調査区西側B-11Gで検出された竪穴住居跡でC-11Gにコーナーの一部がかかる。遺構の約半は攪乱と不明溝によって欠失して規模の把握はできない。

検出された遺構からみて2号同様隅丸長方形プランをとると思われ短径5.0m、長径は炉跡と柱穴を結ぶ線上と推定して復元すれば6.0mを超える。竪穴住居跡として比較的大型に属する方になる。主軸方位はN-45°-Eで2号住居跡とは45°の差異がある。

この住居跡の床面も地形の傾斜に添った傾きを示し西から東に向けて低くなっている。床面上は柱穴と炉跡を除いてはほぼフラットで、炉跡を囲むように硬化面が広がって確認



第14図 向原遺跡2号竪穴住居跡実測図



第15図 向原遺跡3号竪穴住居跡実測図

された。硬化面は炉跡に近い部分では赤褐色粘質土を持ち込んでの貼床状態を示しその縁辺に残る硬化面は貼床が施されていなかった。

竪穴の掘り込みは遺存状態の良いところで30cmを測り主柱穴と見られるピットも床面から75cmあり欠失した部分を除いては良好な遺存状態と云える。炉跡南東部の主柱穴から見て住居跡外にそれぞれ1個の小ピットが検出されたが位置から見て補助的柱穴痕として良いとも思われる。

遺構内の出土遺物は甕、鉢、高坏の脚破片の他土器細片少量であった。

3号住居跡

西寄りB-4GとB-5Gにかけて検出された遺構で南側は調査区外にあり未掘のため全容は不明である。全体地形が西側ほど高くなった地形であった為、表土層も浅く近年までの耕作により遺構上面は攪乱し、削平を受けていた。残存部からプランは確

定できないが、現状での一辺は4.80m、炉跡を挟んでのピット2個が主柱と考えれば隅丸方形プランとなり未掘部分は少なくなるが、主柱4本の住居である可能性も残している。

他の住居跡と同様に炉を中心に硬化面が広がり床面上では炭化物の付着と構造材の一部と思われる炭化木が多く出土しこの住居が火災で焼失した可能性が考えられる。

また土器群に混じって大小の礫が多く検出されたが、住居としての価値が消失した後土器その他の廃棄場所とされた形跡がうかがえる。

住居のプラン確認作業においては調査区外との境界にあった東南部にサブトレンチを設け壁面及びコーナーの検出にあたったが確認できなかった。

床面上では北西コーナー寄りで直径50cmのピットが検出され、埋土中から大小の甕破片が出土した。断言はできないが貯蔵穴らしい。

西側では床硬化面に割り込む様に幾分高い部位が認められたがやや掘り過ぎもあって確かではないもののベッド状遺構が設けられていたと思われる。

出土品の整理に際して壺類が口縁部のみで体部以下が見つからないものが多く、他の場所で破砕した土器を廃棄処分したことも想起させる。全般に出土資料は豊富で復元完形の甕、壺、鉢、器台を中心にコンテナ数箱分にも登る。なお3号住居跡出土の土器には明らかに山陰地方に見られる器型の特徴を持つ大型鉢の他、特異形状の小型壺、碁石入れ状の小鉢などが出土している。さらに赤色顔料付着の甕破片、内底部の付着状況からみて顔料の容器と思われる土器片数点も出土し少ない遺構の中でもいくつかの問題点を残す形となった。

4号住居跡

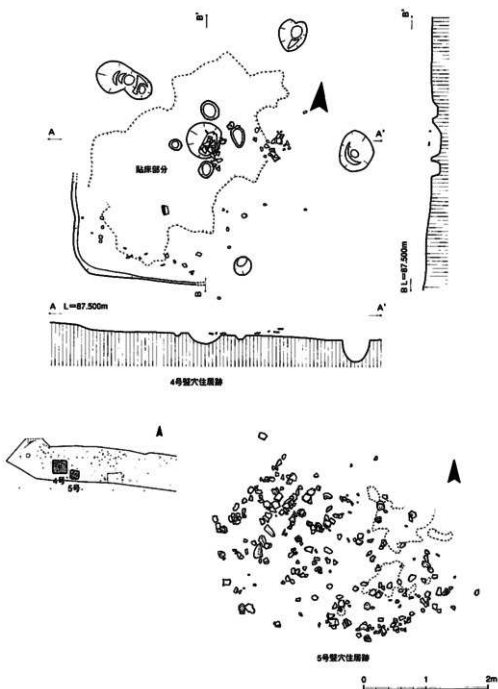
調査開始から比較的早い時期に一部を確認していた遺構であるが、耕作による上部攪乱によってプランの確認に時間を要した。

遺構はB-3G西寄りに位置し、南西コーナーと硬化面及び炉跡と考えられる部分を検出し得た。4・5号住居跡の位置する周囲では時期不明のピット群や、性格不明の土壌が切り合い両者共に遺存状況の良い遺構と云える。従って平面形状の推定も不可能である。この遺構を含めて縁辺からは縄文後～晩期の黒色研磨土器、ほぼ同期と思われる扁平打製石斧、石包丁型石器類の出土が集中していた位置で、縄文期の遺構上に弥生期の住居が重複した事も考えられる。

床面レベルでの出土資料は壺口縁破片など少量が認められ床硬化面より低いレベルでは縄文後期の土器片が出土している。

5号住居跡

4号住居跡に隣接して土器溜まり状に遺物の集中が見られた部分で、上部攪乱により竪穴



第16図 向原遺跡4・5号竖穴住居跡実測図

の形状その他は不明である。

土壌やピット群の重複もあり住居跡としては確定要素に欠けるが土器群の下面直下に他遺構と同じくかなり踏みしめられた硬化面が確認された事と、土器等出土遺物の量も多く住居跡として取り扱った。

この5号と4号は比較的近い位置にあるが相互切り合いはないと思われる。重複したピットの中には5号住居に伴うものもあるかも知れないが確定出来ない。

床面上及び同レベルでの出土遺物は脚付鉢、甕口縁の他向原遺跡では大型に属する壺破片も多くこの種の資料は近場の遺跡では出土例がなく遺構全体の概要が不明で惜しまれるが、調査区外ではまだ多くの遺構が埋蔵されていると思われるため今後に期待が寄せられる。

(2) 遺物

イ 縄文時代の出土遺物

縄文時代の土器・石器群はすべて遺構を伴ってのものではない。調査の速い段階では表採と表土剥ぎ時における耕作土中からの採集品、また遺構確認作業時での赤ホヤ層上面からのドット記録取上げ資料と比較的多く出土したのは弥生の住居跡検出作業時に合せて取り上げた。この分は弥生期に縄文の遺構上に切り合い、重複がなされた可能性もある。時期別にみると早・前期は2点、大半は後～晩期に集中し、晩期最終末に1点の資料が含まれる。器形的には浅・深鉢がほとんどと言って良い。

縄文時代の土器(第17図)

17-1 胎土-砂粒 角閃石を含む。焼成-比較的良。色調-5Y R4/6赤褐色

内面ナデ、器表は左上りの撚糸文、部分的に交差している。粗製の円筒形状土器と思われるが焼きが良く瓦状を呈する。縄文期の古手資料は以上2点に限られていた。

17-2 胎土-最大8mmの小石を含む。焼成-良。色調-5Y R4/6赤褐色。

内面ナデ、器表は左上りの撚糸文で部分的に交差している。荒製の円筒形状土器と思われるが焼きが良く瓦状を呈する。縄文期の古手資料は以上2点に限られていた。

17-3 胎土-白色砂粒 5mm大小石を含む。焼成-良 色調-10Y R5/4にぶい黄褐色
口唇部にヘラ痕、施文された口縁直下はナデ。

17-4 胎土-砂粒。角閃石を含む。焼成-良。色調-表7.5Y R5/4にぶい褐色。
内5Y R4/6。赤褐色。内面はヘラ削り。

17-5 復元口径24.7cm。胎土-白色砂粒を含む。焼成-良。色調-内10Y R6/3にぶい黄褐色。表2.5Y3/1。黒褐色。

内外ともにヘラ研磨。復元径の出せた数少ない資料である。

- 17-6 胎土-細砂粒。長石を含む。焼成-良。色調-10Y R7/4にぶい黄褐色。
器表は横方向のヘラ研磨。内は口唇端より1.5cmまでヘラ研磨。
- 17-7 胎土-細砂粒。角閃石を少量含む。焼成-良。色調-表10Y R6/6明黄褐色。内7.5Y R6/6。橙。
内面に自然発色ではない赤褐色部がある。ベンガラか？
- 17-8 胎土-細砂粒と角閃石をわずかに含む。焼成-普通。色調-10Y R6/4にぶい黄褐色。
- 17-9 胎土-白色砂粒少量。焼成-良。色調-内外2.5Y 6/3にぶい黄。
内外ともにヘラ研磨。
- 17-10 胎土-細砂粒を含む。焼成-普通。色調-表10Y R5/2灰黄褐色。内10Y R6/4にぶい黄橙色。
- 17-11 胎土-白色砂粒少量。焼成-不良。色調-内外10Y R6/4にぶい黄褐色。
- 17-12 胎土-白色砂粒を少量含む。焼成-普通。色調-10Y R7/4にぶい黄褐色。
- 17-13 胎土-砂粒を含む。焼成-不良。色調-内外10Y R5/4にぶい黄褐色。
- 17-14 胎土-砂粒を含む。焼成-普通。色調-内外2.5Y R6/3にぶい黄。
- 17-15 胎土-細砂粒。角閃石を含む。焼成-普通。色調-内10Y R6/4にぶい黄褐色。
- 17-16 胎土-細砂粒をわずかに含む。焼成-良。色調-内外10Y R7/4にぶい黄褐色。
- 17-17 胎土-白色砂粒を含む。焼成-普通。色調-5Y R4/2灰褐色。内外ともにヘラ研磨。
- 17-18 胎土-細砂粒。角閃石を含む。焼成-良。色調-10Y R5/3にぶい黄褐色。
器表に2次焼成の煤付着。
- 17-19 胎土-細砂粒。角閃石を含む。焼成-普通。色調-内外とも10Y R5/4にぶい黄褐色。器面あれしている。
- 17-20 胎土-細砂粒。角閃石を少量含む。焼成-普通。色調-10Y R6/4にぶい黄褐色。
- 17-21 胎土-細砂粒。角閃石をわずかに含む。焼成-普通。色調-表10Y R5/2。灰黄褐色。
内10Y R5/3にぶい黄褐色。
- 17-22 復元口径25cm弱。胎土-白色細砂粒。金雲母少量含む。焼成-良。色調-表10Y R5/3にぶい黄褐色。内2.5Y 4/1黄灰色。
内外ともにヘラ研磨。
- 17-23 胎土-細砂粒。角閃石を少量含む。焼成-普通。色調-7.5Y R5/4にぶい褐色。
- 17-24 胎土-細砂粒。角閃石を少量含む。焼成-普通。色調-内外2.5Y 5/2暗灰黄色。
- 17-25 胎土-細砂粒。角閃石をわずかに含む。焼成-良。色調-内外10Y R5/3にぶい黄褐色。
- 17-26 胎土-砂粒を含む。焼成-不良。色調-内外とも10Y R6/4にぶい黄褐色。

17-27 胎土-細砂粒。角閃石を含む。焼成-普通。色調-表10Y R 4/3にぶい黄褐色。内Y R 6。にぶい黄橙。器表に2次焼成の煤付着。

17-28 胎土-白色砂粒少量を含む。焼成-良。色調-2.5 Y 4/2暗灰黄色。

17-29 胎土-白色砂粒を含む。焼成-良。色調-10 Y R 7/6明黄褐色。

内外とも横方向のヘラ研磨。

17-30 胎土-砂粒。角閃石少量を含む。焼成-良。色調-表2.5 Y 6/4にぶい黄。内2.5 Y 5/2暗灰色。

内外ともにヘラ研磨。

17-31 胎土-細砂粒。角閃石少量を含む。焼成-普通。色調-内外10 Y R 6/4にぶい黄橙色。

17-32 胎土-白色砂粒を含む。焼成-良。色調-10 Y R 5/3にぶい黄橙色。

内外ヘラ研磨。

17-33 胎土-白色砂粒。角閃石少量を含む。焼成-良。色調-表2.5 Y 6/4にぶい黄。内5 Y 4/1灰。

内外面ともヘラ研磨。

17-34 胎土-白色砂粒少量を含む。焼成-良。色調-内2.5 Y 6/3にぶい黄褐色。表5 Y 3/1オリーブ黒。

内外ともに横方向のヘラ研磨。

17-35 胎土-微砂粒。角閃石をわずかに含む。焼成-良。色調-10 Y R 8/3浅黄橙。

器表はよく研磨されている。

17-36 胎土-白色砂粒少量を含む。焼成-不良。色調-10 Y R 4/2灰黄褐色。

器表は荒れている。内面は横方向のヘラ研磨。

18-37 胎土-細砂粒少量を含む。焼成-良。色調-10 Y R 6/3にぶい黄橙色。

18-38 胎土-細砂粒。角閃石を少量含む。焼成-普通。色調-表7.5 Y R 5/6明褐色。内2.5 Y 6/3にぶい黄。

18-39 胎土-細砂粒少量を含む。焼成-普通。色調-内外10 Y R 6/3にぶい黄橙色。

18-40 胎土-白色砂粒を多く含む。焼成-普通。色調-10 Y R 7/4にぶい黄橙色。

18-41 胎土-白色砂粒微量を含む。焼成-良。色調-10 Y R 7/2にぶい黄橙色

18-42 胎土-白色砂粒を含む。焼成-普通。色調-10 Y R 5/4にぶい黄褐色。

内外ともヘラ研磨。

18-43 胎土-微砂粒と角閃石を含む。焼成-良。色調-内外2.5 Y 6/3にぶい黄色。

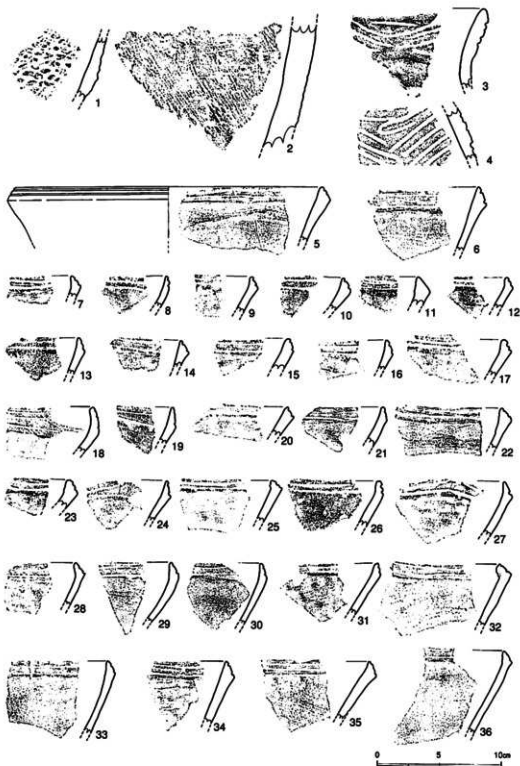
18-44 胎土-白色砂粒を多く含む。焼成-ややあまい。色調-表10 Y R 4/1褐灰色。内10 Y R 4/2灰黄褐。

内面は器面あれ。器表のヘラ研磨は荒い。

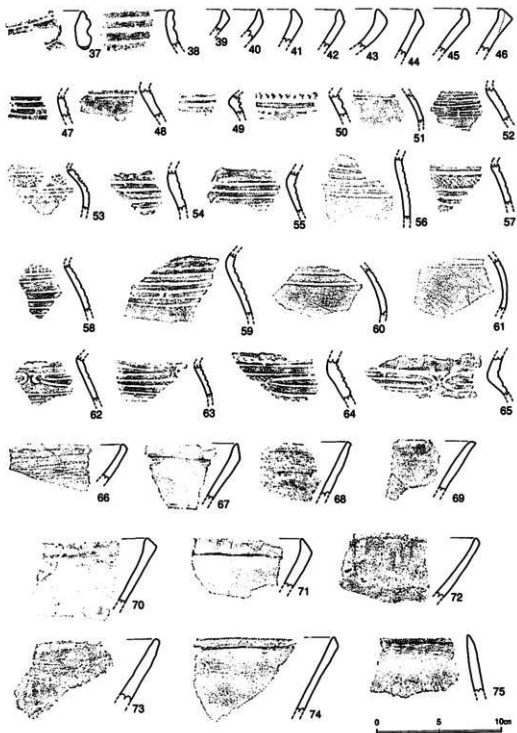
- 18-45 胎土—白色砂粒を含む。焼成—普通。色調—10Y R6/3にぶい黄橙色。
内外とも横方向のヘラ研磨。
- 18-46 胎土—細砂粒。角閃石を含む。焼成—普通。色調—内外10Y R6/3にぶい黄橙。
内外とも横方向のヘラ研磨。
- 18-47 胎土—砂粒をわずかに含む。焼成—良。色調—5Y R3/1黒褐色。
- 18-48 胎土—白色砂粒少量を含む。焼成—良。色調—10Y R5/2灰黄褐色。
内外ともヘラ研磨。
- 18-49 胎土—白色砂粒をわずかに含む。焼成—普通。色調—10Y R6/4にぶい黄橙色。
- 18-50 胎土—砂粒少量を含む。焼成—普通。色調—10Y R7/4にぶい黄橙色。
- 18-51 胎土—細少量。角閃石を含む。焼成—普通。色調—10Y R5/4にぶい黄褐色。
- 18-52 胎土—細砂粒を含む。焼成—普通。色調—10Y R6/4にぶい黄褐色。
器表ヘラ削り。
- 18-53 胎土—砂粒少量を含む。焼成—普通。色調—10Y R6/3にぶい黄橙色。
- 18-54 胎土—細砂粒。角閃石をわずかに含む。焼成—良。色調—内10Y R5/2灰黄褐色。表
10Y R6/4にぶい黄橙色。
内外ともに横方向のヘラ研磨。
- 18-55 胎土—白色砂粒。角閃石を少量含む。焼成—良。色調—内外10Y R7/4にぶい黄橙
色。内面ヘラ研磨。
- 18-56 胎土—細砂粒を含む。焼成—良。色調—内外10Y R6/4にぶい黄橙色。
内面ヘラ削り。
- 18-57 胎土—細砂粒と角閃石をわずかに含む。焼成—良。色調—内外10Y R6/4にぶい黄
橙色。
内面は横方向のヘラ研磨。
- 18-58 胎土—細砂粒。角閃石をわずかに含む。焼成—良。色調—表7.5Y R3/3暗褐色。内
10Y R5/2灰黄褐色。
内面は横方向のヘラ研磨。
- 18-59 胎土—細砂粒。角閃石を少量含む。焼成—良。色調—表10Y R7/4にぶい黄橙色。内
10Y R5/3にぶい黄褐色。
内外ともに横のヘラ研磨。
- 18-60 胎土—細砂粒を含む。焼成—良。色調—表2.5Y 4/1黄灰色。内10Y R6/3にぶい黄
橙色。
内外面ともにヘラ研磨。

- 18-61 胎土-細砂粒。角閃石をわずかに含む。焼成-良。色調-内外10Y R3/1黒褐色。
内外ともにヘラ研磨。
- 18-62 胎土-細砂粒と角閃石少量含む。焼成-良。色調-表2.5Y4/1黄灰色。内10TR7/4にぶい黄橙色。
内外ともに横方向のヘラ研磨。
- 18-63 胎土-砂粒を含む。焼成-不良。色調-内外10Y R5/4にぶい黄褐色。
- 18-64 胎土-細砂粒。角閃石を含む。焼成-良。色調-表7.5Y R6/6橙。内5Y R5/6明赤褐色。
内面は横のヘラ研磨。
- 18-65 胎土-白色砂粒。角閃石を含む。焼成-良。色調-内外10Y R7/6明黄褐色。
- 18-66 胎土-白色細砂粒を少量を含む。焼成-良。色調-内外10Y R6/6明黄褐色。
内外面ともヘラ研磨。
- 18-67 胎土-細砂粒。角閃石をわずかに含む。焼成-良。色調-2.5Y7/4浅黄色。
内外ともにヘラ研磨、器表口縁部では研磨のあとナデている。
- 18-68 胎土-砂粒を含む。焼成-普通。色調-表10Y R6/6明黄褐色。内10Y R4/1褐灰色。
器表は荒い。内面はヘラ研磨、口唇部は平らに整形。
- 18-69 胎土-細砂粒、含雲母少量を含む。焼成-良。色調-表2.5Y6/3にぶい黄。内10Y R3/1黒褐色。
内外面ともヘラ研磨。
- 18-70 胎土-細砂粒。角閃石を含む。焼成-良。色調-内外10Y R6/4にぶい黄橙色。
内外ともにヘラ研磨。
- 18-71 胎土-細砂粒。角閃石を含む。焼成-良。色調-内外10Y R3/2黒褐色。表黒色。
内外ともにヘラ研磨。内面は特に丹念に研磨。
- 18-72 胎土-細砂粒。角閃石を含む。焼成-普通。色調-表7.5Y5/3にぶい褐色。
内面はヨコナデ仕上げ。
- 18-73 胎土-最大3mmの白色小石を多く含む。焼成-普通。色調-表5Y R5/4にぶい赤褐色。内2.5Y4/1黄灰色。
内外ともヘラ状工具による荒い削り痕を残す。
- 18-74 胎土-細砂粒と角閃石をわずかに含む。焼成-良。色調-内2.5Y4/1黄灰色。表2.5Y5/2暗灰黄色。
内外ともに丹念なヘラ研磨。
- 18-75 胎土-細砂粒。角閃石をわずかに含む。焼成-普通。色調-内2.5Y7/3浅黄色。
- 18-76 胎土-白色砂粒を少量含む。焼成-良。色調-内外7.5Y R7/4にぶい橙。

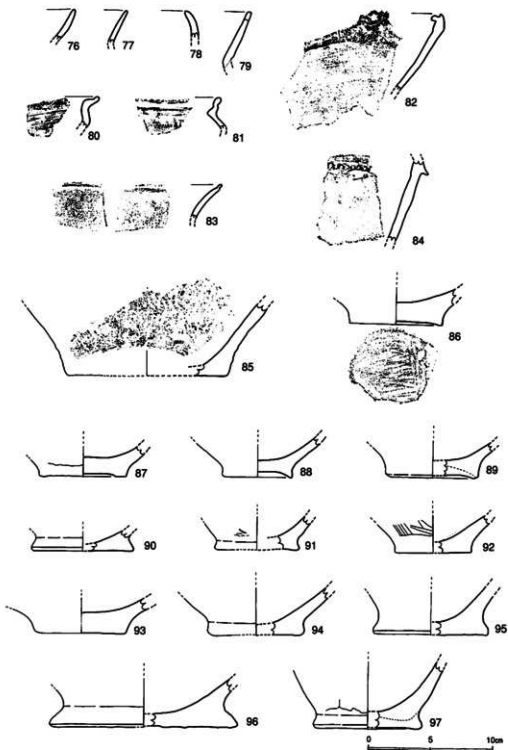
- 内外ともに丹念なヘラ研磨。
- 18-77 胎土-細砂粒をわずかに含む。焼成-良。色調-内外2.5Y3/1黒褐色。
内外のヘラ研磨は丹念である。
- 19-78 胎土-砂粒少量を含む。焼成-普通。色調-10Y R5/4にぶい黄褐色。
内外とも横方向のヘラ研磨。
- 19-79 胎土-細砂粒。金雲母少量を含む。焼成-良。色調-内外10Y R5/3にぶい黄褐色。
波状口縁。
内外に横方向のヘラ研磨。
- 19-80 胎土-砂粒をわずかに含む。焼成-良。色調-7.5Y R6/4にぶい橙。
内外へヘラ研磨。
- 19-81 胎土-微砂粒をわずかに含むがよく精選されている。焼成-良。色調-内外10Y R5/3に黄褐色。
内外ともヘラ研磨。
- 19-82 胎土-細砂粒。角閃石を微量含む。焼成-良。色調-内外2.5Y R4/3オリーブ褐。
表2.5Y4/1黄灰色。
内外面ともヘラ研磨。口唇部はナデ消している。
- 19-83 胎土-微砂粒をわずかに含む。焼成-良。色調-10Y R6/3にぶい黄橙色。
- 19-84 胎土-白色砂粒を含む。焼成-普通。色調-表10Y R4/2灰黄褐色。内2.5Y4/4オリーブ褐。
- 19-85 底部径12.8cm。1/4強残。胎土-砂粒を多量に含む。焼成-不良。色調-10Y R5/4にぶい黄褐色。
- 19-86 底部径7.4cm。胎土-細砂粒を多量に含む。焼成-普通。色調-表10Y R6/3にぶい黄橙色。内2.5Y5/2暗灰黄色。
器表にヘラ整形痕を残す。
- 19-87 底部径6.9cm。胎土-砂粒を含む。焼成-普通。色調-内外7.5Y R5/4にぶい褐色。
器表底部からの立上り位置で縦方向のヘラ状工具痕を残す。
- 19-88 胎土-白色砂粒を少量含む。焼成-普通。色調-表5Y R4/6赤褐色。内10Y R5/3にぶい黄褐色。
内外ともに丹念なヘラ研磨。外底部は幅1.5mmのヘラ状工具による丹念な研磨痕が残る。
- 19-89 胎土-砂粒。角閃石を含む。焼成-普通。色調-表7.5Y6/4にぶい橙。内2.5Y6/3にぶい黄。底部円盤貼付。
- 19-90 底部径8.0cm。胎土-砂粒少量。角閃石を含む。焼成-普通。色調-内外10Y R7/3にぶい黄橙色。



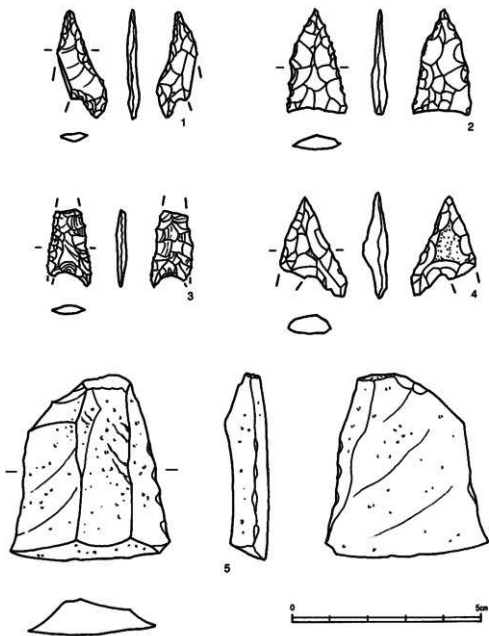
第17図 向原遺跡出土遺物実測図(1) 縄文土器



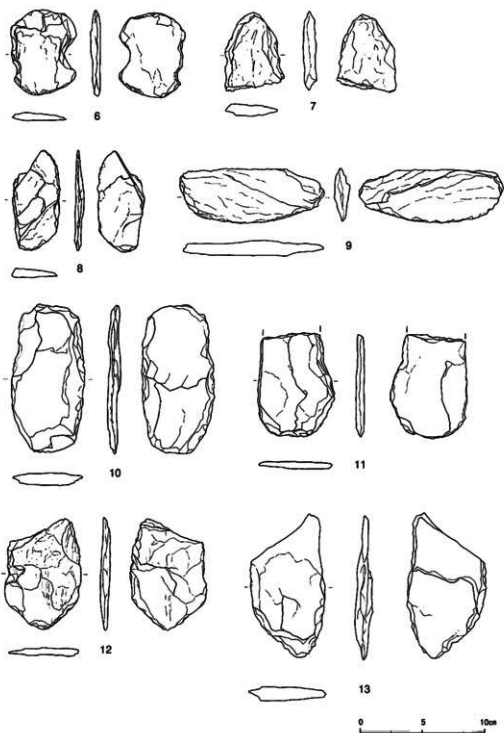
第18図 向原遺跡出土遺物実測図(2) 縄文土器



第19図 向原遺跡出土遺物実測図(3) 縄文土器



第20圖 向原遺跡出土遺物実測図(4) 石器



第21图 向原遺跡出土遺物実測図(5) 石器

- 19-91 底部径6.8cm。1/4残。胎土-砂粒少量を含む。焼成-普通。色調-7.5Y R7/6橙。
- 19-92 底部径6.2cm。1/4残。胎土-砂粒。角閃石を含む。焼成-良。色調-表5Y R5/6赤褐色。内10Y R5/2灰黄褐色。
- 器面荒れているが内外ヘラ研磨。
- 19-93 底部径7.0cm。胎土-白色砂粒を多く含む。焼成-不良。色調-内10Y R3/1黒褐色。表7.5Y4/6褐色。
- 19-94 底部径7.8cm。1/4残。胎土-細砂粒を多く含む。焼成-普通。色調-表7.5Y R6/6橙。内2.5Y6/3にぶい黄。
- 器表ヘラ研磨。
- 19-95 底部径9.3cm。胎土-3~4mm大の小石、白色砂粒。角閃石を多く含む。8mm大黒曜石破片の混入あり。焼成-不良。色調-表2.5Y R5/6明赤褐色。内7.5Y R6/6橙。
- 内外面とも器面あれている。
- 19-96 底部径15.0cm。1/4残。胎土-砂粒少量と1cm大小石を含む。焼成-良。色調-内外10Y R6/4にぶい黄橙色。
- 内外面とも器面あれている。
- 19-97 底部径8.8cm。1/4弱残。胎土-白色砂粒を含む。焼成-普通。色調-表7.5Y R4/3褐色。内2.5Y5/2暗灰黄色。
- 底部から立上る位置で指整形痕を残す。底部円盤貼付。

弥生時代の出土遺物

弥生時代の土器はそのほとんどが遺構出土で主に2・3・4・5号住居から検出された。1号住居跡出土の土器は細片がわずかにあるだけで概略は(1) 遺構に記したとおりである。

2号住居跡の出土遺物

- 22-1 甕で頸部から胴部にかけての破片で頸部径15.2cm。最大胴部径18.0cmを測る。胎土-細砂粒を含む。焼成-普通。色調-表2.5Y R6/6橙。内10Y R6/4にぶい黄橙色。焼きむらがある。

器表胴部において縦方向のハケ調整痕がみられる。

- 22-2 小型鉢(手捏ね土器)。口径6.6cm。最大胴部径9.4cm。胎土-白色砂粒を多く含む。焼成-普通。色調-内10Y R5/3にぶい黄褐色。裏表7.5Y R5/3にぶい褐色。焼きむらにより10Y R4/2灰黄色を示す部分もある。

※同一個体と思われる平底の手捏ね破片(第22図3)がある。接点がないため別図としている。

22-3 鉢又は甕底部か。底部径5.0cm。手捏ね土器。胎土—白色砂粒を多く含む。焼成—普通。色調—内10Y R5/3にぶい黄褐色。表7.5Y R5/3にぶい褐色。

焼きむらがある。内底部に指圧痕がみられる。

22-4 甕底部。底部径6.5cm。胎土—砂粒を含む。焼成—普通。色調—表10Y R4/2灰黄褐色。内10Y R6/4にぶい黄褐色。

底部に煤の付着。

3号住居跡の出土遺物

22-5 脚付甕 復元定形。口径15.3~15.5cm。頸部径12.3cm。器高19.0cm。胎土—細砂粒。金雲母を含む。焼成—良。色調—7.5Y R5/3にぶい褐色。

内外ともハケ目調整のあとナデ仕上げ器表に使用による煤の付着がある。

22-6 脚付甕 接合資料。口径19.5cm。頸部径17.1cm。脚台径10.0cm。器高25.0cm。胎土—白色砂粒を多く含む。焼成—普通。色調—内外とも10Y R4/1褐灰色。

整形調整痕を残していない。脚台内に砂を付着させている。

22-7 甕破片 口縁—体部 $\frac{1}{4}$ 残。口縁部径19.4cm。頸部径15.7cm。胎土—白色砂粒を含む。焼成—普通。

22-8 甕破片 口縁—肩 $\frac{1}{2}$ 弱残。胎土—白色砂粒を多く含む。焼成—不良。色調—内外とも10Y R6/6明黄褐色。

内面頸部以下に赤色顔料の付着が残る。

23-9 高坏 脚部以下欠失。口縁部径24.8cm。頸部内径19.2cm。坏部高9.0cm。胎土—細砂粒。褐色土粒を含む。胎土は精選されている。焼成—良。2次的に火を受けている。色調—内2.5Y R6/6橙。表10Y R6/3にぶい黄橙色。

整形—内外ともハケ調整は下から上に向けて施す。口縁部内外はハケ調整のあとナデ。

23-10 高坏 復元完形(坏部の $\frac{3}{4}$ 脚底部 $\frac{3}{4}$ 欠失)。口縁部径19.5cm脚底部径14.2cm。器高16.4cm~。

胎土—砂粒。金雲母微量を含む。焼成—良。色調—内外とも7.5Y R6/3にぶい褐色。

表坏体部は上から下に向けてハケ調整、口縁下面までは横回転のナデ、脚部も上から下に向けてハケ調整、下部は横に回転ナデ、脚内はナデ仕上げ、坏内面は荒いハケ整形のあと細かなハケ調整で仕上げている。

23-11 鉢 復元完形($\frac{1}{2}$ 弱残)。口径10.8cm。底部径9.3cm。器高7.0cm。

胎土—細砂粒と金雲母をわずかに含む。焼成—普通。色調—10Y R6/2灰黄褐色。

軟質のため器面あれしているが巾2mmのハケ目調整、器表ではその後細目のハケで斜め方向に調整。内面は横と斜めのハケ調整、内底部も同じ。

口唇部はヘラ切りのあとナデている。一例のみの出土であり、形状の整美さ特殊性から祭祠も考えられる鉢である。

- 23-12 鉢(大半欠失)体部下半の形状不明。胎土一白色砂粒を含む。焼成一普通色調一内外とも10Y R4/2灰褐色。

内、横ナデ縦方向に浅い条痕を残す。表。口唇部は平たくナデ、全体にハケ調整を行っているがナデ消している。

- 23-13 鉢(口縁～体部破片 $\frac{1}{8}$ 残)。口径13.0cm。胎土一白色砂粒を含む。焼成一良。色調一内外2.5Y 6/3にぶい黄～黄灰色。焼きむらあり。

- 23-14～20 脚付甕。脚部のみ。14は脚高が最も低い。15は端部は細く整形されている。いずれも比較的大きい甕になるか、15、17、18、19では脚内部甕との接合位置で細かな砂を付着させている。

- 24-21 器台 復元完形。口径14.2cm。器高18.5cm。底部径13.4cmややいびつ。胎土一細砂粒を含む。焼成一良。色調一内外5Y R5/4にぶい赤褐色。

くびれは上方に位置し体部は肉厚裾の開きは少ない。整形一器表裾部はやや巾広のハケ調整をナデ消している。体部は縦方向上から下に向けて細いハケ調整、上部と裾は横ナデ仕上げ、内側では裾部で巾広のハケで横と斜めの調整、裾端はヘラ切りされている。

- 24-22 器台 復元完形。口径14.6cm。器高18.8cm。底部径13.7cm。胎土一細砂粒を含む。焼成一良比較的に焼きしまっている。色調一内外5Y R5/4にぶい赤褐色。

器形整形ともに21に等しく同一工人が同じ条件下で作成したと思われる遺物である。

- 24-23 器台 一部欠損。口径12.5cm。器高17.3cm。底部径14.1cm。胎土一白色砂粒を含む。焼成一良。色調一内外10Y R5/4にぶい黄褐色。くびれは丈夫。裾はほぼ直線的に広がる。整形一裾部外周に横方向に叩き目を残している。口縁部はナデ。器表体部は上から下方向にハケ目調整、内面裾部では上から下のハケ調整の後横方向にハケ調整している。

- 24-24 器台 一部欠損。ほぼ完形。口径12.2cm 器高18.2cm。底部径14.6cm。くびれは上方に位置、体部上方では肉厚、裾部に向けて直線的に開く。胎土一細砂粒。金雲母を含む。焼成一良。色調一内外10Y R7/6明黄褐色。

内外のハケ目調整は浅く残る。ナデと使用による磨耗が不鮮明、裾端部はヘラ切り。

- 24-25 器台 復元完形。口径12.8cm。器高16.4cm。底部径14.1cm。胎土一細砂粒。3mm大の小石を含む。焼成一良。色調一内外10Y R5/3にぶい黄褐色。

器表、下から上に向けてハケ調整、裾部では斜めのハケ調整、くびれは上方に位置し比較的しまった形状を示している。裾部は直線状に広がる。

- 25-26 壺 $\frac{1}{2}$ 弱残。口縁部は欠失。頸部径13.3cm。最大胴部径21.8cm。底部径7.3cm。胎土一白色砂粒。石英粒金雲母を含む。焼成一普通。色調一内外とも5Y R6/4にぶい橙。

器表頸部は横ナデ仕上げ、肩から突帯間は下から上に向けてハケ調整、突帯から底部にかけてはナデ仕上げ、内面は斜め下方から上に向けてハケ目調整、内底部付近では指頭により整えている。

25-27 壺 口縁部は欠失。頸部径19.6cm。最大胴部径22.8cm。底部径7.0cm。現存高25.0cm。胎土一砂粒を含む。焼成一良。色調一内外10Y R5/4にぶい黄褐色。

器表体部下半の煤は使用によるものか？上半部に煤の付着はない。整形一器表肩から突帯間は縦方向上から下に向けてハケ調整、体部下半はナデ消している。突帯直下は横方向の指ナデ、内面肩口は斜めと下方からのハケ目調整、貼付突帯の刻目はくずれ気味である。

25-28 壺 底部を含め欠失。口径8.3cm。頸部径8.0cm。最大胴部径15.3cm。胎土一白色砂粒。金雲母少量を含む。焼成一普通。色調一内外とも2.5Y7/4浅黄色。

器表頸部は横ナデ、肩は縦方向のハケ目、体部下半は斜め方向のハケ調整、内面は口縁から肩部までナデ消し、以下はやや巾広の横方向ハケ目調整、器形上の特徴として口縁はやや開きながらも直線的な立上りを見せ底部は丸く突らせている。底部は平部になる傾向がうかがえる。内外面の煤付着は二次的に火を受けたと思われる。全資料中1点しか出土していない。

25-29 脚付鉢 復元完形(口縁部一部欠損。脚底部欠強残)。口径12.3cm。器高11.7cm～12.7cm。台部径8.3cm。胎土一白色砂粒と最大5mm大の小石を含む。焼成一普通。焼きむらあり。色調一内外とも10Y R6/4にぶい黄橙色。

器表は丹念にナデで仕上げている。内面は斜めと横方向のハケ目調整、脚内面は大小の砂が付着している。

25-30 脚付鉢 復元完形(底部欠 口縁欠失)。口径13.9cm。器高10.8cm。底部径は約9.6cm。胎土一砂粒と長石を含む。焼成一良。色調一10Y R6/3にぶい黄橙色。

内外ともにハケ目調整を施しているがナデによって消えている。脚内部もナデ仕上げ、口唇部はへら切りのあとナデ。

29の脚付鉢と共通点が多く23-11図鉢の器形、整形上も類似している。同一目的の所産か。

25-32 壺 復元完形(口縁部部分欠失あり)口縁部径15.2cm。頸部径11.8cm。器高28.5～30.5cm。最大胴部径24.2cm底部径7.5cm。器形がいびつ。胎土一白色砂粒。最大4mmの小石を含む。焼成一普通。色調一10Y R5/3にぶい黄褐色～黄灰色。

器表の煤付着には使用と破碎後の二次的焼成の2種が認められる。口縁部は内外ともにナデ仕上げ、内外面ともハケ調整であるが胴下半部ではハケ目が残っていない。内面下はハケ目を残していない。

4号住居跡の出土遺物

26-33 甕 口縁破片(1/4残)。口径15.6cm。頸部径13.4cm。胎土-白色砂粒少量を含む。焼成-普通。色調-5Y 2/1黒。整形-口唇部は四角。

調整-口縁内外は横ナデ、器表は縦方向のハケ調整が薄く残る。内面は斜め方向のハケ目が浅く残る。

26-34 甕 底部破片。胎土-白色細砂粒を含む。焼成-普通。色調-表5Y R 5/4にぶい赤褐色、内7.5Y R 5/3にぶい褐色。

脚台上部は縦のハケ目、内底部に指圧痕を残す。内面の媒は2次的な付着。

26-35 ミニチュア脚付甕(底部のみ)。胎土-白色細砂粒を含む。焼成-普通。色調-内外とも10Y R 7/4にぶい黄褐色、手捏ね土器である。

26-36 大型鉢 口縁部破片(1/4強残)。口径33.0cm。最大胴部は38.4cm。る。器形にかなり特徴のある鉢で形状は山陰系の天神式、編年としては出雲Ⅲ様式(b類)とⅣ様式(a類)に極めて近い。时期的には中期中葉-後葉にかけて位置づけられている。同遺構内出土資料に同系の遺物はなく、類似のも見られない。

5号住居跡の出土遺物

27-37~41 甕。それぞれ多少の形状に違いがあるが、いずれも最大胴部径は上位にくと考えられる甕である。底部及び脚台との接合面がなく、体部下半の状況は不明である。

27-43、28-47、48の脚台部、及び28-53~57の甕底部に同一個体があると思われる。

27-42 壺口縁部破片(袋状口縁壺)。胎土-白色砂粒、4mm大の小石を多く含む。焼成-不良。色調-表7.5Y R 7/6橙、内5Y R 6/6橙。かなり器面荒れしている。口径15.0cm。頸部径12.1cm。

器形はやや肉厚、頸部から外反し、くの字状に曲がる口縁は端部も丸く整えられる。調整は器表頸部で縦方向のハケ目、口縁と肩部ではナデ消し、内面頸部は横方向のハケ目、口縁内側は横ナデ、袋状口縁壺はこの1点の他に出土していない。

27-43~28-48 脚付甕へ脚部。43~46は反り気味に広がる脚の特徴と脚内部の砂目付着に共通点を有している。28-47、48は低く直線的に広がる共通点を有する。

28-49 器台 一部欠損。口径10.6cm。器高13.0cm。底部径12.7cm。胎土-砂粒を含む。焼成-普通。色調-内外2.5Y R 6/6橙。

くびれ部は明瞭でないが上部になる。体部から裾に至る部分は肉厚である。器表ではハケ調整のあとへラ削りとナデによる仕上げ、内面もへラ削りのあとナデ。

28-50 器台 上部欠失(1/4弱残)。底部径11.0cm。胎土-砂量少量。比較的微細である。焼成-やや不良。色調-内外7.5Y R 7/6橙。

くびれがやや下に来る器形か、体部中央で肉厚、上下逆の可能性もある。器表では体部に縦方向のハケ調整痕が見られる。

28-51 器台 破片。底部径15.0cm。胎土一白色砂粒と3mm大の小石を含む。焼成一普通。色調一内外2.5Y R4/6赤褐色。

器面荒れしている。内面に斜め方向のハケ調整痕が残る。他の器台と違い直線的に広がる裾部は水平に整形されている。

28-52 鉢 破片(1/5強残)。胎土一微砂粒。白色砂粒少量を含む。焼成一ややあまく器面荒れしている。色調一内外10Y R7/4にぶい黄橙色。

幾分内反気味の体部、口唇部はへら状工具により内に向けて削られている。底部形状は不明。

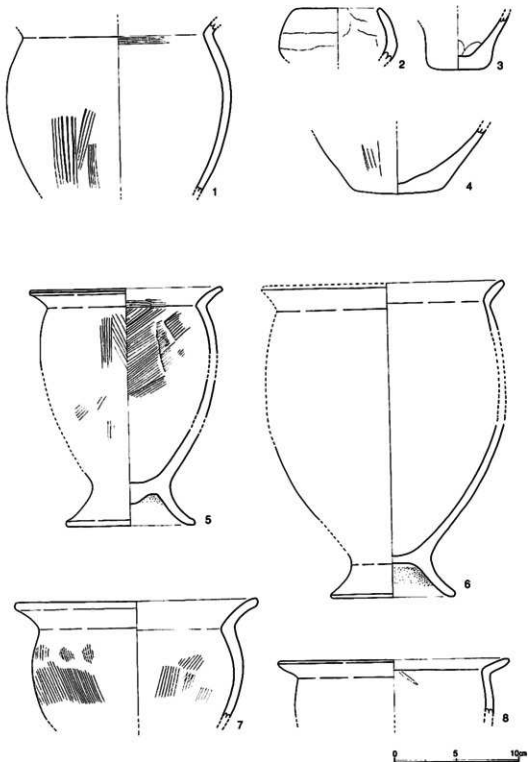
28-53~57 いずれも甕底部と思われる。55を除いて平底で56、57は比較的大型に属する甕底部になるとと思われる。

29-58 壺(図上復元)。口縁部径19.4cm。頸部径12.6cm。最大胴部径27.7cm。器高60cm前後か？胎土一白色砂粒。長石を含む。焼成一やや良。色調一内外10Y R5/3にぶい黄褐色。

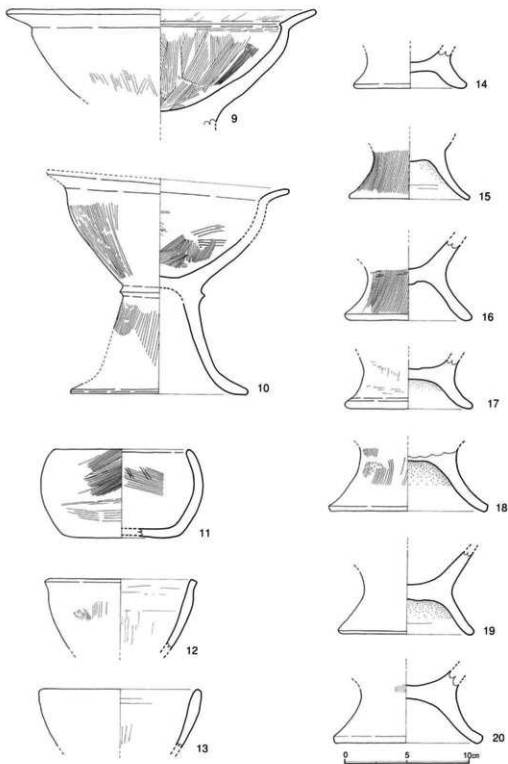
破碎後2次的に火熱を受けて黒変している部分や赤褐色の破片がある。内外のハケ調整は器面荒れもあるが、ナデ消しが見られる。

縄文時代の石器(第20図 1~5)

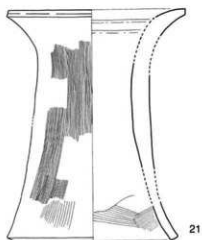
遺跡内の出土石器はすべて遺構を伴っていない一括資料である。20-3は黒曜石製、他は頁岩製で掲載していない破片を含めた出土石器中、石鏃、削器、剥片石器の石材は黒曜石では阿蘇系、出水系、姫島系があり、その他の石器は頁岩、緑色変岩が多く見られた。21-6~13は緑色変岩の打製石器であるが、6は分銅型に属する形状を示し使用面は図の上下端で磨耗が見られる。7は打製石斧と思われ刃部を含めた1/2以上は欠失している。8・9は石包片形石器で8は一部欠失しているものの、それぞれ半月形状面に刃部が形成され後晩期の土器群と同時期の産と考えられる。10・11・12・13はいずれも縦長の打製石斧で10は完形、残りは1/2~1/3は欠失した資料である。うち12は先端に磨耗痕がみられ根菜類掘削等に使用されたものかと考えられる。



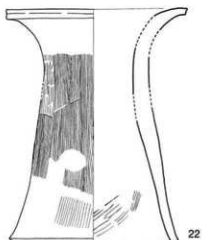
第22图 向原遗址竖穴住居出土遗物实测图(1)
 1~4(2号住居跡)・5~8(3号住居跡)



第23图 向原遺跡竖穴住居跡出土遺物実測図(2)
9~20(3号住居跡)



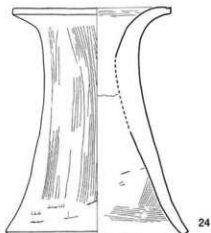
21



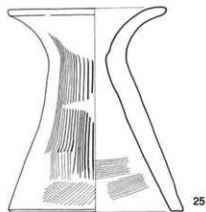
22



23



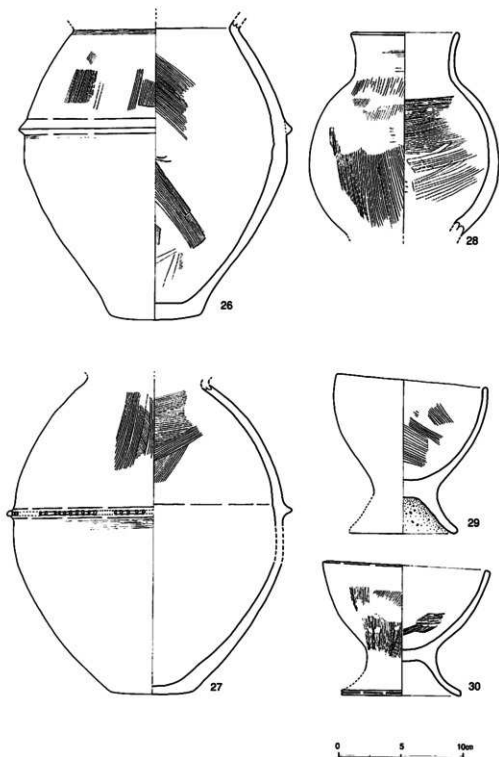
24



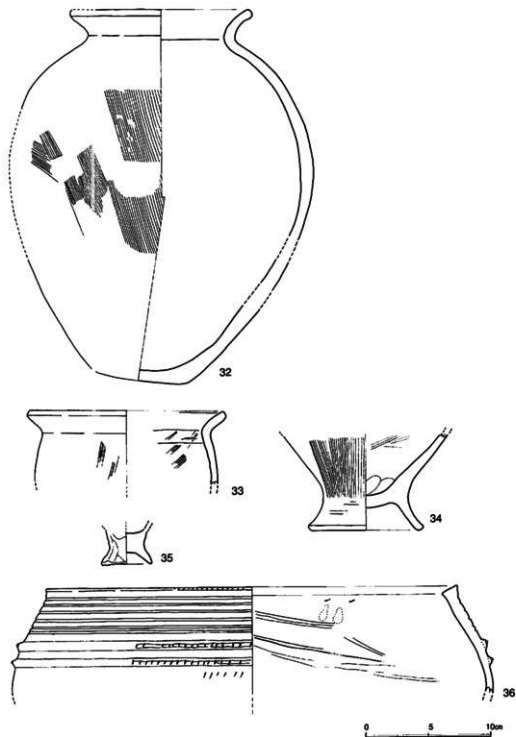
25

0 5 10cm

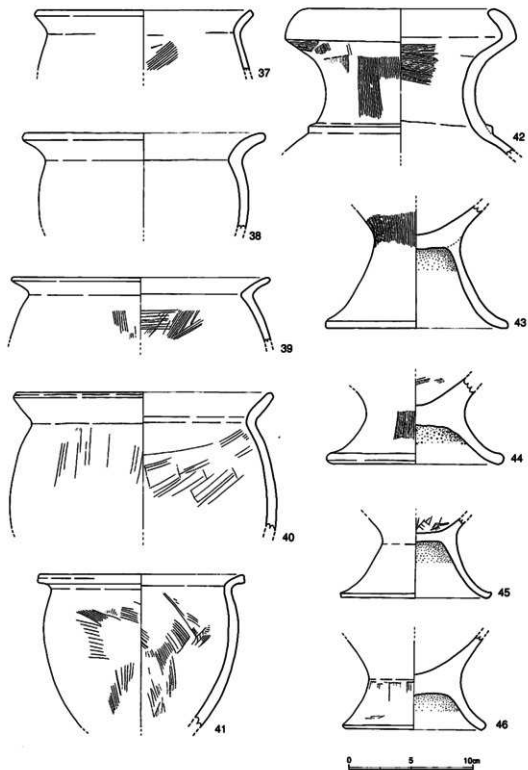
第24図 向原遺跡豎穴住居跡出土遺物実測図(3)
21~25(3号住居跡)



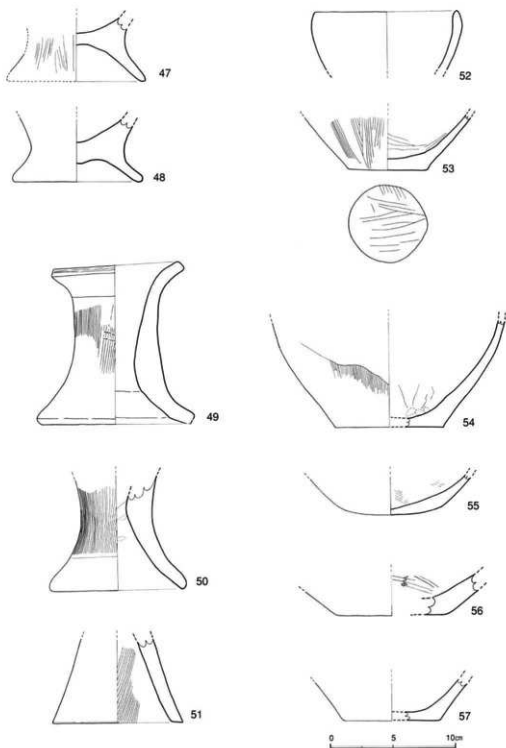
第25図 向原遺跡竪穴住居跡出土遺物実測図(4)
26~30(3号住居跡)



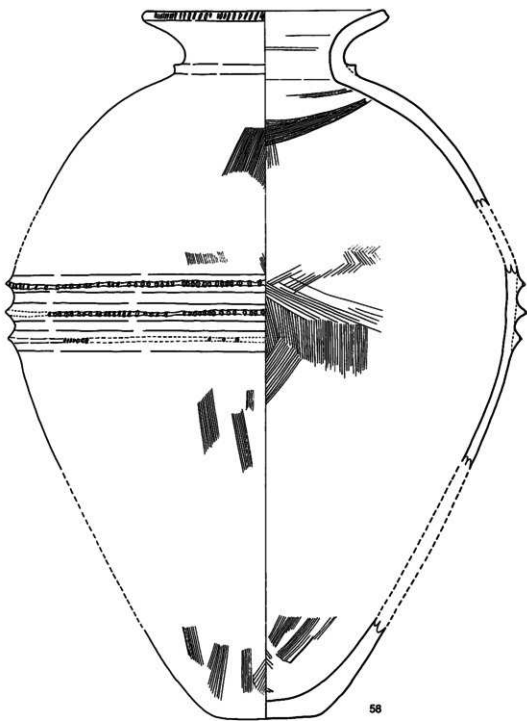
第26図 向原遺跡竪穴住居跡出土遺物実測図(5)
32(3号住居跡)・33~36(4号住居跡)



第27図 向原遺跡竪穴住居跡出土遺物実測図(c)
37~46(5号住居跡)



第28図 向原遺跡竪穴住居跡出土遺物実測図(7)
47~57(5号住居跡)



第29图 向原遺跡豎穴住居跡出土遺物実測図(8)
58(5号住居跡)

Ⅳ まとめ

向原遺跡の調査もⅠ章で記した寺の上遺跡と同様に農道計画に伴った中の狭い直線の面積調査であった。対象とした面積に対する遺構占有率は低く遺跡の中心部分からは大きく逸れていると考えられる。過去周辺地域においては農作業時の偶然の発見や大規模な圃場整備事業、公共建築工事によりその都度甕棺や土塼、木棺墓等の遺構・遺物が検出されてきた経緯がある。しかし埋葬に関連した遺構の多様さに比較すれば住にかかわる発見報告例は非常に少ないと言える。この点からみれば向原遺跡の5基の竪穴住居跡の調査成果は遺跡の広がりを考える上での貴重な考察材料を与えられたものとして十分の成果があったと言える。

竪穴住居跡

検出された5基の竪穴住居の中で全体の概要がわかるのは1号住居跡だけが残る4基の遺構はすべて一部が欠失するか、調査区外にかかり、他上面攪乱によって竪穴壁面を失い床面の確認に止まったりであった。

結果的には1号住居跡は隅丸長方形、主柱2本が炉跡を狭み、長径の片側壁面に貯蔵穴を備え短径の壁際にベッド状遺構を持つ後期型の竪穴形態を示し、この形状に近いと考えられるのが東側の2号住居跡と西側の3号住居跡である。但し2号においては検出された範囲ではベッド状遺構は見つかっていない。

4号と5号住居跡としたものは、上面攪乱により部分的な確認に止まり遺構としての情報量は少なく、反面では出土遺物の量で1号、2号住居跡に比較すれば逆転した情報を備えていた遺構である。それぞれの遺構は切り合いもなく3・4・5号住居跡は比較的近い位置関係にあるが3号と1号では40mの距離を有し、1、2号間も14mの間隔を置いている。時間的な差を計算に入れば遺構密度はさらに低くなり、当然ながら集落跡としての中心部が存在していることを考えなければならない。地形的には、東に向けてと北に向けて傾斜し西と南方向に高くなる地形で、この等高線形成は変わっていないと考えられる。

当遺跡の西北及び東南の区域では過去において相当数に登る甕棺、土塼墓の密集が調査されているし、Ⅲ章で取上げたように天神免遺跡でも狭い範囲に切り合いながら各種の遺跡検出がなされた事で裏づけられた。

調査区の北側も緩やかな傾斜地形のためさほど日照条件も悪くなく居住に添わない環境ではない事から遺構の範囲は幾分広がる可能性を有している。また西側では現在は県道が通っているものの谷巾は狭く米野山裾部の畑地では弥生期の遺跡存在を想起させる遺物採集も多い地域で、平成12年秋に宅地造成に伴う道路工事に際して少なくとも2基の竪穴住居跡が削られた壁面に残っている。同じ弥生後期に比定される遺跡のひとつになろう。やはり南側に向けての範囲に遺跡の広がりを求めたいところであるが今のところその確証は何もない。

向原の住居形態は肥後、とりわけ菊池川流域に多く見られる平面形状の特性、及び伴って出土する土器種別に大差はないものの、細かに見てゆくと明らかに地域差があることを明示する結果となった。

これは人々の定着が弥生期の常識であった反面、交易の範囲が拡大化すること起因するものであろう。やや時期の下る山鹿市方保田東原遺跡までは菊池川を挟んで直線にして約4kmと近く、上流地域にある七城町小野崎遺跡にしても9km程の近距離にありすべて圏内の遺跡と見て良い。交通は川を利用すれば楽な行程と言える。従って菊水町の諏訪原遺跡も陸路、水路の利用でごく近い位置にある。

当遺跡の5基の住居跡は形態的には後期後半としても何ら問題ないが、遺構内の出土資料の上では、幾分時期をさか上るものとする。

出土した土器

遺構出土の土器は、その大半が西側の3・4・5号住居跡に集中していた。1号住居跡などは、住居を撤退する際すべての生活用品を持ち出したかのごとく出土遺物が少なく、2号においてもほぼ同様の結果であった。

各遺構の出土遺物は可能な限り掲載したが時間的都合により掲げられなかった資料も多い。

土器群の中で最も多いのは甕で平底と脚台を有するものがあり、甕は比較的大型に部類する肩の張りが強く胴部の突帯、頸部に突帯を持つものがあり甕、甕ともに最大胴部径が上部にあるものが多い。甕に関しては、近隣の遺跡と何ら変らないが甕については類例を検討中である。器台の点数の上ではさほど多くないが形状の整ったものが6点出土している。高坏は多くなく実測可能な2点の他破片数点がある。

鉢は丸、又は平底のものに加えて脚付の資料がある他形状の異なる大型の鉢として明らかに山陰系の様式にその形状を求められる資料が1点だけ出土した。破片での出土の為全体は不明であるが山陰地方での編年では前期に始まり中期後葉に至る間、幾分の変化をなすもので当遺跡4号住居跡から出土した資料である。口径、胴部径とも通常の鉢に比べてはるかに大きく体部以下の形状は不明であるが平底を呈し、広口の深鉢になるものと思われる。器形の特徴、施文の手法、調整等にもその共通点を求める事ができる資料であるが、一点しか出土せず惜しまれる。4号住では他に祭祠用のミニチュア脚付甕1点の出土もあった。

この他には3号住での甕でこれも1点のみの資料がある。やや口縁の開く短頸甕でフラスコ型を呈する小型の資料で調査区外との境界壁面からの出土で大半は欠失している。また袋状口縁の甕口縁部が1点のみ出土していて、整理過程で全て点検を行ったが同一個体破片も見つかっていない。

3号住での高坏2点は西合志八反畑遺跡や免田期に併行する秋永遺跡においての出土例があ

る。検出された5基の住居跡の出土資料の再検討も今後の課題として残された。

※調査報告の形をとりながら、諸般の事情も重なり不満を残した報告に終る点を深くお詫びすると同時に、遺跡からの一括資料として紹介した縄文後～晩期の土器、石器群について早急に報告の準備を行い活用頂けるべく整理を計画中です。今回の調査、報告に際し、御指導、御助言を頂いた関係各位の皆様のおさなる御助力をお願い致します。

第3章 天神免遺跡

I. 調査の組織

調査主体 鹿央町教育委員会

調査責任者 鹿央町教育委員会

教 育 長 東 正治

調査事務体制 鹿央町教育委員会

事務局長 中 山 知 博(前)

事務局長 井 出 昌 人(現)

係 長 坂 田 英 二(前) (調査事務)

参 事 西 林 一 弘 (本調査主任)

調査指導・助言

・熊本県教育庁・文化課

課長補佐 島 津 義 昭

課長補佐 松 本 健 郎(現熊本県立熊本高等学校教頭)

参 事 古 城 史 雄

・山鹿市立博物館

館 長 隈 昭 志

副 館 長 中 村 幸史郎

・山鹿市出土文化財管理センター

嘱 託 前 田 軍 治

調査協力者

・国立八代工業高等専門学校

教 授 佐 藤 伸 二

・別府大学・文学部史学科

助 教 授 坂 田 邦 洋

・熊本県立装飾古墳館

館 長 桑 原 憲 彰

学 芸 員 長谷部 則 和(現熊本県文化課主任学芸員)

学 芸 員 坂 口 圭太郎(現熊本県文化課文化財保護主事)

・鹿央町文化財保護委員会

委員長 寺 本 重 美

委員 坂 田 明 彦

調査作業員

江藤 昭代、江藤エミ子、池田須夜子、木村天授子、坂上 瑞子、輪内タツ子、
後藤 済子、城 やよい、山下ヨシ子、一 シクヨ、藤本サチ子、佐野木敬子、
川口キヌ子（以上鹿央町）

前川 誠一、江崎 和義、江崎 栄子、中尾ツユ子、松本エイコ、富田スミ子、
松本 尚子、松本 悦子、神島 愛子（以上山鹿市）

材津 幾代、福山須美子（以上鹿本町）

石川 春代（菊鹿町） 中島 仁（西合志町）

和田 賢一（菊陽町） 渡邊 耕平（熊本市）

調査補助業務（空中写真撮影含む）

（株）文化財環境整備研究所

調査報告書作成

総 括 鹿央町教育委員会

総 務 坂 田 英 二（前係長）

総 務 木 下 政 司（現係長）

主 任 西 林 一 弘（参 事）

出土資料整理・実測・製図

（有）遺跡整備計画

報告書作成指導助言

山鹿市立博物館館長

山鹿市立博物館副館長

山鹿市出土文化財管理センター

九州大学大学院人文科学研究院助手

長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所

別府大学助教授

人吉市教育委員会

深田村教育委員会

隈 昭 志

中 村 幸史郎

前 田 軍 治

西 健一郎

安 楽 勉

坂 田 邦 洋

和 田 好 史

北 川 賢一郎

Ⅱ. 調査の経過（調査日報抜粋）【天神免遺跡】

1998年(平成10年)

9月29日

向原遺跡の空中写真撮影の時間を利用して、天神免遺跡の調査対象範囲内の調査前準備として、抜根、草刈り作業を実施した。

10月 5日

本日から本格的に天神免遺跡の発掘調査に着手した。調査対象区は町道を挟んで南北に分かれていて、以前の町道拡幅により約1.5～2mの段差がついている。北側(下段)は畑地で、南側(上段)は宅地移転跡である。

除草作業中に、遺物の表採が両段についてみられ、大半が弥生土器であるが須恵器片2点を検出した。特に、甕棺片と見られる厚手の土器も数点認められた。

測量班によりトラバー設定及び水準移動を行う、下段近くの水準は75.000mで、西方に位置する向原遺跡とは約10mの比高差をもつ。

10月 8日

現場事務所設置。道路計画線(調査対象区域)に幅杭設置

10月 9日

周辺地形測量(1/500)。上段の試掘痕を中心に手作業で表土剥ぎ及び攪乱土の除去実施。まとまった遺物とともに硬化面らしきブロック状の土を確認。

10月13日

下段の重機による表土剥ぎ開始。4基の甕棺を確認するが、何れも上部は地下げによる削平で消失している状態である。

10月14日

下段表土剥ぎ。西側半分がローム下層にまで削平されており、遺構の検出は全くみられない。5基目の甕棺出土。

10月16日

台風接近のため作業を休止し、現場の保守管理を行う。

10月19日

上段の重機による表土剥ぎ。プレハブ横(南側)の試掘を実施。数点の遺物を検出したが、ローム層まで削平を受けており、遺構等は確認されず耕作土層は客土とみられる。

10月20日

下段、ジョレンによる荒掛け実施、

10月21日

上段の層位確認のため調査区周縁5ヵ所にサブトンレンチを設定し、地山までのレベル確認を行った。

10月22日

5号甕棺実測・撮影。上段は重機による表土(客土)剥ぎを実施。

10月23日

1号甕棺検出作業・撮影。

10月26日

下段北拡張区の表土剥ぎ。

10月27日

上段北東よりで6号甕棺出土。1号甕棺実測。

10月28日

上段検出面の清掃。まだ明確ではないが中央付近に住居跡複数棟の切り合いの可能性が高いと思われる。

10月29日

1号甕棺完掘撮影。山鹿市立博物館隈館長の来訪を受ける上段住居跡と7号甕棺は同時期(弥生中期末～後期初)に位置づけられる。

10月30日

6号甕棺完掘・撮影。山鹿市立博物館中村副館長、山鹿市出土文化財管理センターの前田氏の

来訪を受ける。

11月 2日

上段の移植ゴテによる全面清掃を行い遺構検出を実施。2号、5号甕棺実測。

11月 4日

3、4号甕棺検出プランの半裁

11月 6日

4号甕棺から人骨片を検出。3、6、7号甕棺実測・撮影。

11月 9日

上段調査区で、掘立柱建物跡とみられる柱穴出土(50cm φ 前後、東西510cm、南北330cm)

11月10日

3、4、6、7、8号甕棺実測。下段遺物ドット記録。上段遺物分布状況記録を行う。

11月12日

4号甕棺内人骨出土状況実測及び取り上げ。副葬品は検出されなかった。

11月13日

上段の切り合った住居跡プランの確認作業。V群遺構内出土遺物平面実測。

11月16日

上段V群、I群の遺構検出作業

11月17日

I群1層遺物分布図、V群3層遺物分布図

11月18日

I群1層、V群3層遺物出土状況実測、取り上げ実施。

11月19日

V群でまとまった遺物が出土し、その中に黒曜石製品も確認された。

11月20日

Ⅱ群内S P、V群4層目遺物平面実測。

11月21日

V群5層目遺物検出作業。Ⅱ群1層目遺物実測、Ⅲ群S P実測

11月24日

Ⅱ群内中央付近に硬化面を確認。I群S P、V群5層目遺物分布状況実測。

11月25日

8号甕棺実測。V群5層目遺物平面実測。

11月26日

Ⅲ群SH-19内2層目遺物、8号甕棺実測

11月27日

現況測量、8号甕棺実測、S B-10遺構検出状況撮影

12月 1日

8号土層断面実測、S K-17、S H-15平面図

12月 3日

S K-18、S B-10土層断面図、撮影

12月 4日

Ⅲ群内S P完掘、12月 5日 IV群2層目遺物分布状況実測図、S K-18土層断面

12月14日

10月に予定されていた調査区内の植栽樹木の移植が、今季の異常気象等の影響で12月になったため、その部分の調査は移植後しか実施出来なくなったため、県と地権者に協議し、2月18日

まで調査期間を変更することで合意した。

12月15日

空中写真撮影実施

1月13日

上段拡張区について、一部検出作業に入る。

1月14日

植栽樹木が撤去されたため、遺構検出作業に入る。

1月20日

上段の調査が終わった部分の埋め戻し作業に入る。

1月23日

下段埋め戻し作業。

1月28日

上段拡張区の土層断面検出作業。

1月29日

上段拡張区の遺構検出作業。

2月 1日

雨天のため現場事務所で出土品整理作業。

2月 4日

調査区域の残りの埋め戻し作業。

2月 9日

上段拡張区2層目の検出作業。

2月12日

上段拡張区完掘、状況撮影。

2月15日

現場機材撤収完了。

Ⅱ. 調査の概要

調査を実施した天神免遺跡は向原遺跡の東280m、先に調査を終了した寺の上遺跡の西400mの地点に位置し海拔74～76mの高さにある。対象面積は向原遺跡の北側から東に向けての農道を挟んだ3つの区域で計814㎡の範囲と広域農道延長線上に借地して設置したプレハブ事務所用地の4ヶ所を調査した。

遺跡の東側を北に向けて流れる岩原川沿線の両岸地域では昭和30年前後から農作業に伴う掘削等で度々石棺や甕棺の発見が相次いでなされ、当時なかった調査機関に代わって山鹿高校考古学部(顧問・原口長之)によって発掘調査が進められた。

昭和52年県圃場整備事業の拡大に際して県文化課による本格的な発掘調査が実施され、弥生前中期から後期に至る墓域として埋甕、土墳、木棺墓群が続々と検出され多大な成果が上げられた。県による調査地点は広区下原集落の直上に広がる台地端に添った一帯で、調査では遺構内から細型銅剣先端1と耕地整理測量に従事中の作業員によって同銅剣先1が採種された経緯がある。

今回の調査対象区では県調査区域北側に立地する地点で地形的には東と北に向けて傾斜する位置にあたる。

調査によって圃場整備に際しての天神免遺跡が北に向けて範囲が広がる事が判明し、かつ向原遺跡の生活域との関連が今後の課題として残された。この2つの遺跡を結ぶ線上では遺跡調査の実施はないが集落跡と墓域はセットとして総合的遺跡を形成している可能性が高い。調査は農道北側の休耕地から着手し表土剥ぎを開始して間もなく耕作土中から甕棺破片が採集され、Ⅱ層土は赤褐色粘質の地山層に至り、西側二分の一の区域で上面の削平を受けた甕棺と比較的深く掘られた甕棺墓壇プランを次々と確認する事ができた。

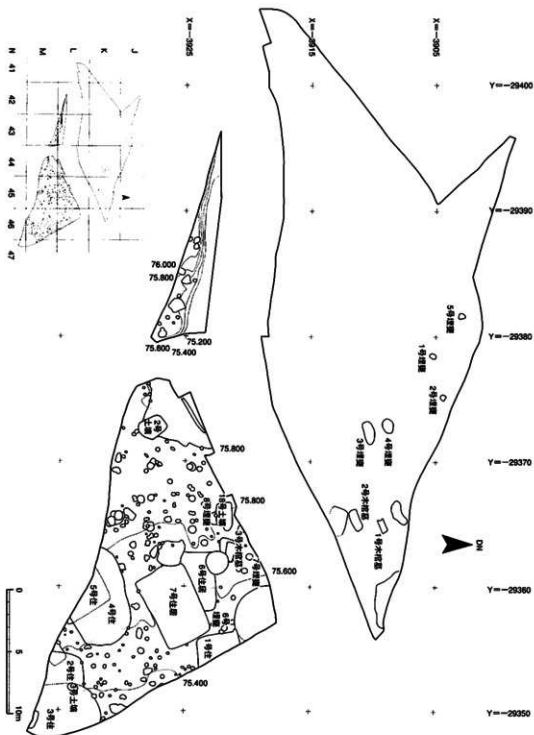
結果的に北側区域で5基の甕棺墓と2基の木棺墓及び埋甕用の土壇と思われる数カ所の遺構を確認した。また道路南東の三角形の調査区では道路計画により移転となった家屋の跡地で相当の攪乱が懸念されたが木造建築であった事から家屋の基礎は深くなく井戸、トイレ、ゴミ穴等の攪乱は受けていたが遺構の検出ができた。

この調査では弥生中期以降の土壇、木棺墓、埋甕の他、竪穴住居も9基以上を発掘し得た。3遺跡の中では遺構占有率と密度が最も高くそれだけに切り合い、重複があり慎重な対応が要求

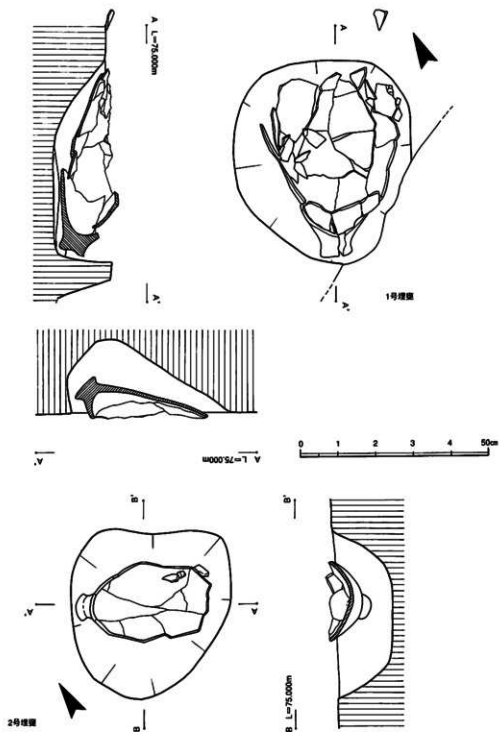
された。また弥生期遺構に加えて古代～中世の遺構、遺物も検出された。宅地跡では3基の埋甕と2基の木棺墓、竪穴住居跡、不明土塹とピット群を調査する事ができた。農道を挟んで南側に鋭角に尖った区域があり工事対象とされていた上、聞き取り段階で近場より石棺の発見例と思われる地点に近い事から調査を行った。重要遺構の検出はなかったが性格不明の土塹、ピット群が見つかった。

現場では事務所として区域外に借地の上プレハブを設置したが道路予定延長線上にあった為L字形に試掘溝を設定し掘削を試みたが関連する遺構、遺物はなかった。

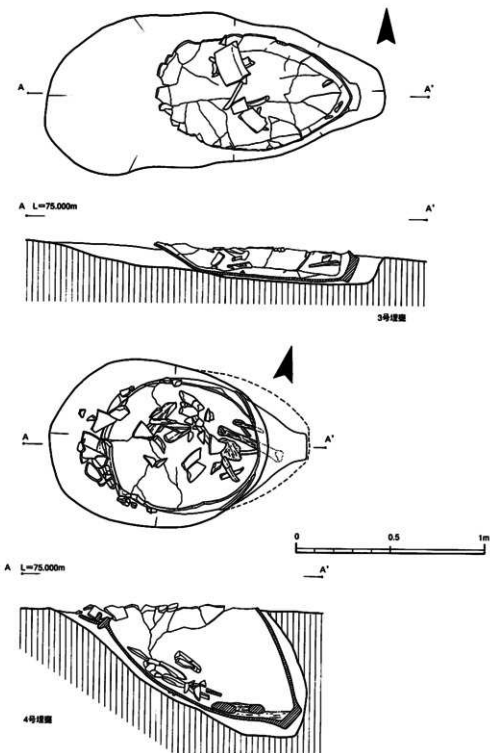
天神免遺跡調査の結果、県教委文化課で調査された遺跡が北方向にさらに拡大していた事、向原遺跡を含めて高い地域に弥生期の遺跡が埋蔵されている可能性を求められる点、北斜面に向けても急激な比高差がなくゆるやかな傾斜地形を保つ事から遺跡が広がる可能性を十分残している事が予想される事となり成果は上がったと云える。



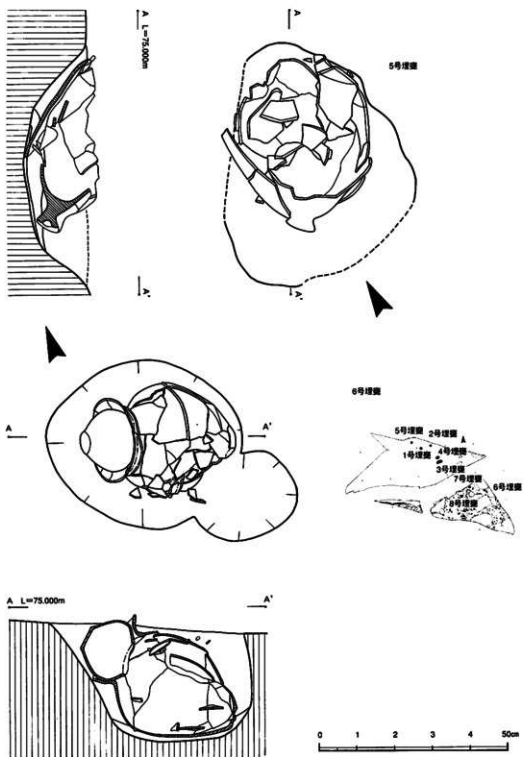
第30図 天神免追跡グリッド設定図・同遺構位置図



第31圖 天神免遺跡埋篋出土状態実測図(1)



第32図 天神免追跡埋壙出土状態実測図(2)

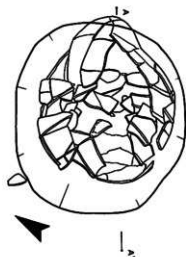


第33图 天神免遺跡埋藏出土狀態実測図(3)

7号埋藏

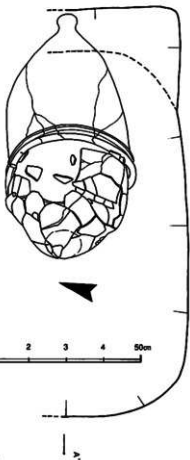
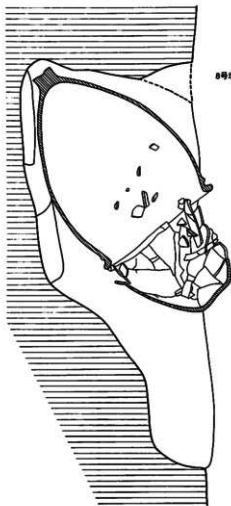


A L=75.80cm



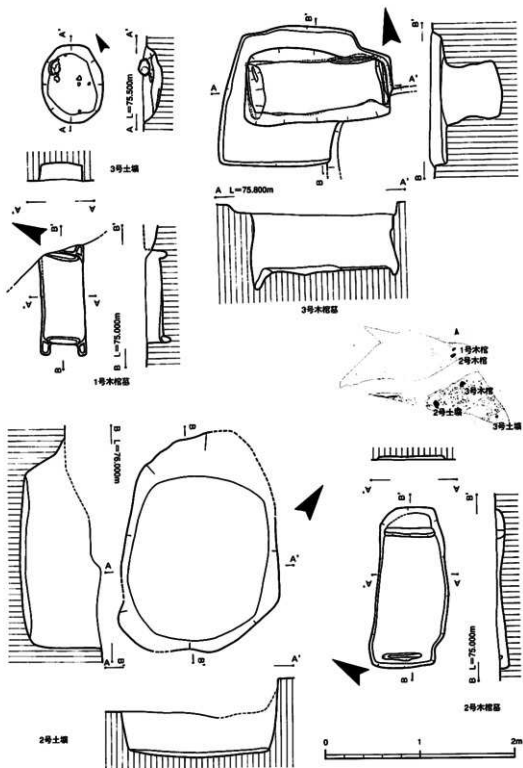
A' A L=75.80cm

8号埋藏



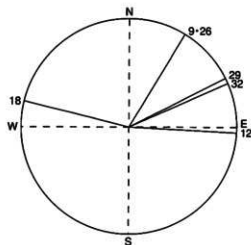
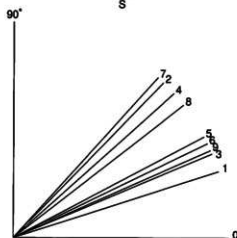
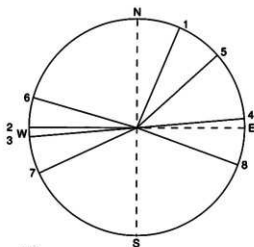
0 1 2 3 4 50cm

第34图 天神免遺跡埋藏出土状態実測図(4)



第35图 天神免遺跡木棺墓・土墳実測図

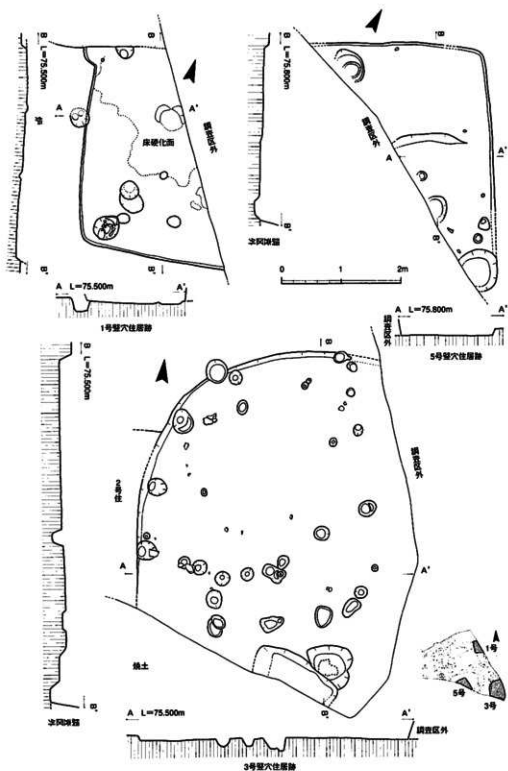
第2表 天神免追跡廻棺・木棺・土墳墓主軸方位と傾斜角



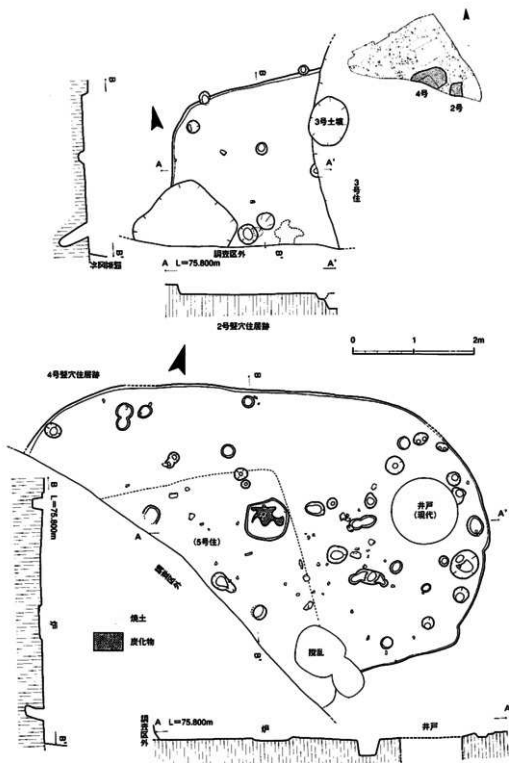
号	主軸方向	埋納傾斜角	単・複	備考
1	N21.8° E	18.5°	不明	成人棺
2	N90.0° W	46.0°	不明	
3	N92.5° W	23.5°	単・ 複	成人棺 上蓋 欠損
4	N84.0° E	42.5°	単・ 複	成人棺, 人骨残存 上蓋は欠損
5	N46.9° E	28.0°	不明	成人棺?
6	N73.5° W	26.5°	単・ 複	歯棺 小児棺
7	N115.5° W	48.5°	不明	小児棺
8	N108.5° E	38.5°	単・ 複	成人棺 上蓋もほぼ残存
9	方向不明	25.0°	単・ 複	成人棺 上蓋一部残存

号	種別	主軸方向	計測値 (直径×短径)	備考
9	土	N30.0° E	0.80×0.59	
12	土	N91.5° E	1.95×1.25	一部覆土されている
18	木	N75.5° W	約1.53×0.65	本棺は両端小口は側板 一部のはずれたみ残存
26	土	N30.0° E	2.34×1.60	
29	木	N62.5° E	約1.39×0.55	本棺は両端小口は はがれたみ残存
32	木	N65.0° W	約1.16×0.45	本棺は両端小口は 側板のはがれたみ残存

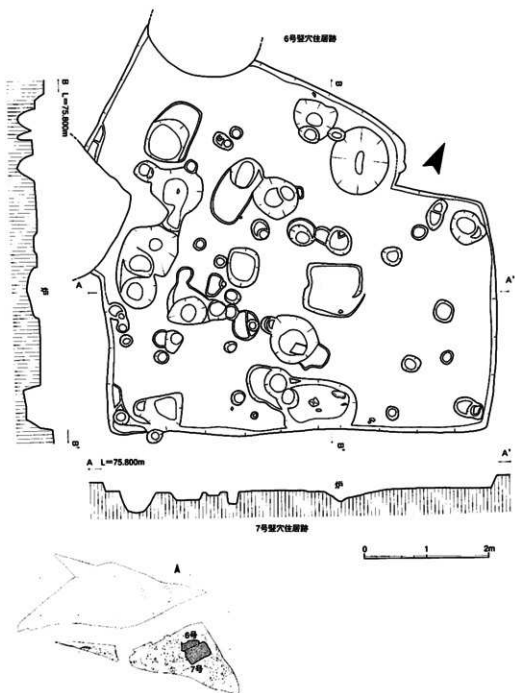
※ 上 - 土墳墓
木 - 木棺墓



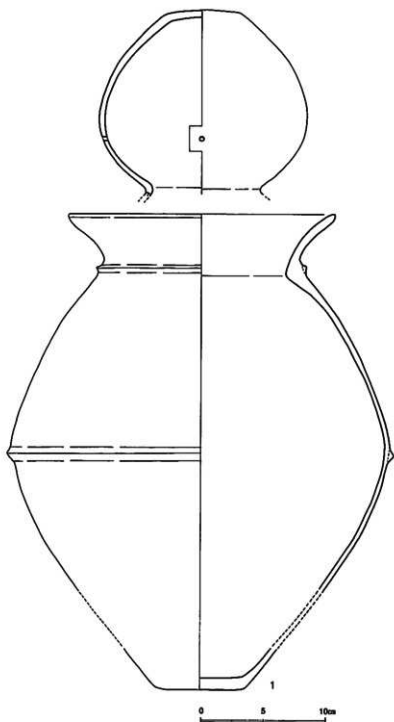
第36图 天神免遺跡壁穴住居跡実測図(1)



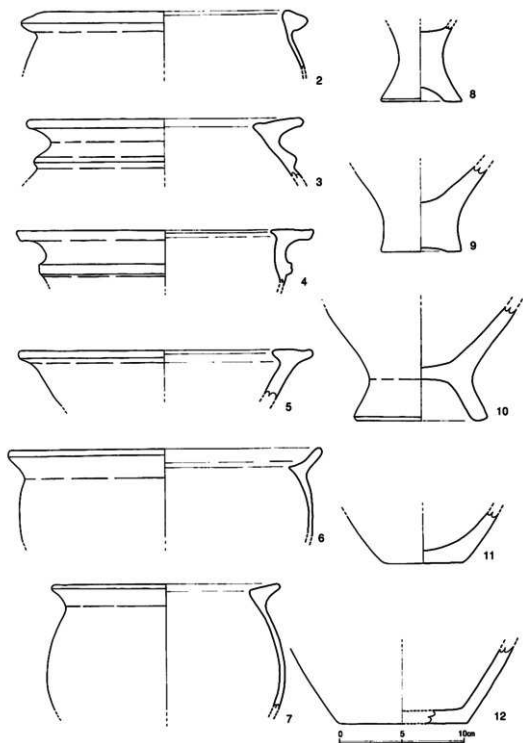
第37図 天神免遺跡墓穴住居跡実測図(2)



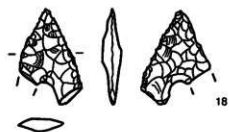
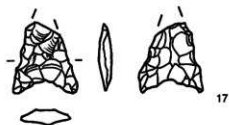
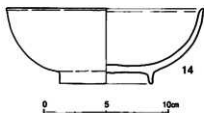
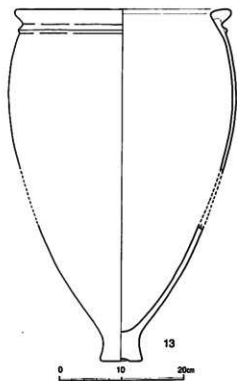
第38図 天神免遺跡壁穴住居跡実測図(3)



第39図 天神免遺跡出土遺物実測図(1)



第40图 天神免遣跡出土遺物実測図(2)



第41図 天神免遺跡出土遺物実測図(3)

参考文献一覧

『下南部遺跡発掘調査報告書』	熊本市教育委員会	1979.3
『鹿本地方の弥生後期土器』	九州古文化研究会	1979
『森貞次郎博士古希記念古文化論集』		1982
『方保田東原遺跡Ⅰ』	山鹿市立博物館調査報告書 第2集	1982
『方保田東原遺跡』	山鹿市教育委員会 第3集	1984
『方保田東原遺跡Ⅲ』	山鹿市立博物館調査報告書 第7集	1987
『鹿央町史』	鹿央町史編纂室	1989
『六地藏遺跡・Ⅰ』	熊本県教育委員会 第105集	1989
『交流の考古学』	肥後考古学会	1991
『八反田・A B 遺跡・八反田遺跡』	西合志町教育委員会報告 第3集	1993
『中堂遺跡』	人吉市教育委員会	1993
『迫原遺跡』	西合志町文化財調査報告 第5集	1995
『原の辻遺跡』	原の辻遺跡調査事務所調査報告 第9集下巻	1998
『城尾屋敷遺跡』	鹿央町教育委員会	1998
『高ノ原遺跡』	深田村教育委員会 第2集	1999
『原の辻遺跡』	原の辻遺跡調査事務所調査報告 第16集	1999
『原の辻遺跡』	原の辻遺跡調査事務所調査報告 第18集	2000
『原の辻遺跡』	原の辻遺跡調査事務所調査報告 第19集	2000
『夏目遺跡』	熊本県教育委員会 第128集	
『山尻遺跡』	熊本市教育委員会	
『神水Ⅱ』	熊本市教育委員会	1993
『鹿本・菊池の文化財誌』	山鹿・文化財を守る会	1997.10

後記

菊池川中流域に位置する鹿央町ではスイカ、メロン等の果実と文化財の宝庫として知られていますがまだ未調査の遺跡、埋蔵されたままの遺跡、遺構、そして遺物は多くのロマンを秘めて眠っています。今回計画された広城宮農団地農道整備事業は地域活性化の農道として緑辺市町村と県内外をも含めた農産物の出荷と交通網の整備を兼ねた道路として一日も早い開通が望まれるところです。

先に実施・報告に至った広・城尾屋敷遺跡と今回の3遺跡の他にも路線区内に調査対象とされる区域を残していますが地域発展の為の農道は不可欠です。

しかし埋蔵される文化財は古代の人々が残した有形・無形の現代人に対するメッセージであり私達の使命はこれらの遺構や遺物を調査し的確な分析を行って後世に伝えて行く事だと考えています。

発掘調査には多くの労力と時間、より確かな観察眼による各種記録作業、そして出土品の整理と分析と山積みの仕事が発生します。

この一連の作業は実に細かな神経を必要とする事は業務にあたった者の常識と云えるでしょう。

本報告はこれらの事実関係を的確に判断し掲載し得ていない事をお詫びすると同時に今後の方針として調査に対する諸条件の整備を十分に行い現場調査と報告の質の向上を計りたいと思います。

3遺跡の調査期間中度々来訪頂き調査手法の御指導・助言を頂いた山鹿市博・隈館長、同副館長・中村幸史郎様、山鹿市出土文化財管理センター・前田軍治様、別府大学史学科・坂田助教授、八代高専・佐藤教授、菊水町教委・益永学芸員、又報告書作成作業中には九州大学埋文調査室・西健一郎先生、長崎県原の辻遺跡調査事務所・安楽勉様、北九州市埋蔵文化財調査室長・中村修身様、他から来訪又は書面、電話等での御助言を頂き、終盤に至り熊本市教育文化課の大城、吉田様の御教旨を頂いたのは実に喜ばしい限りでした。

紙面上ではありますが深く御礼申し上げます。今回の報告で掲載に及ばなかった図、その他の考察については別途形を変えて報告致したと考えていますので改めて関係各位の皆様御指導、御助言を頂ければ幸いです。

(編集室・N-M)

検出遺構・出土遺物 写真



表土剥ぎ（東から）



作業風景〈浮土排土〉（西から）



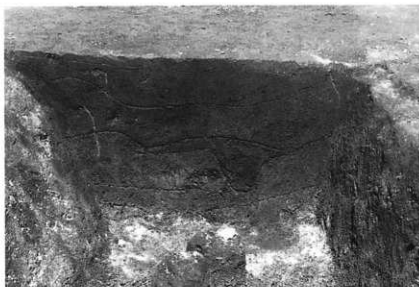
B-3G 中世遺物出土状況（南から）



1号溝 完掘状況（南から）



2号溝 遺物出土状況（南から）

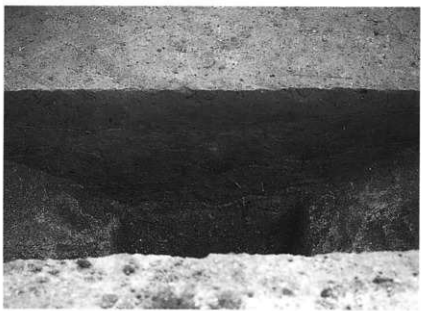


2号溝 土層断面（南から）

図版3 寺の上遺跡(3)



2号溝 検出状況（南から）



5号溝 土層断面（南から）



5号溝 完掘状況（南から）



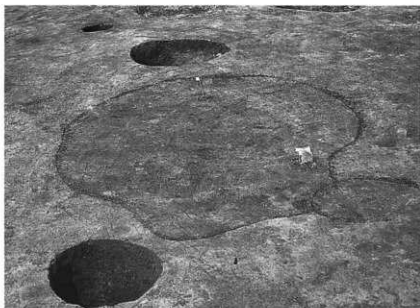
手前から 1号・5号・2号溝 完掘状況（西から）



2号土壇 検出状況 (南から)



2号土壇 遺物出土状況 (南から)



3号土壇 プラン確認 (南から)



3号土壇 検出状況 (南から)



4号土壇 プラン確認（南から）



4号土壇 完掘状況（西から）



5号土壇検出状況（東から）



5号土壇 完掘状況（東から）



7号土壇 検出状況（南から）



調査区遠景（城尾屋敷方向を望む）（西から）



1号住居跡 検出状況（南から）



1号住居跡 発掘状況（東から）



1号住居跡 ピット内遺物（北から）



2号住居跡 プラン確認（南から）



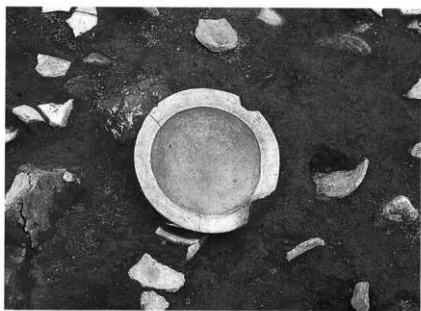
2号住居跡 完掘状況（南から）



3号住居跡 検出状況（東から）



3号住居跡 遺物出土状況（南から）



3号住居跡 遺物出土状況〈高坏〉（南から）



3号住居跡 遺物出土状況〈完形器台〉（南から）



3号住居跡 完掘状況（東から）



4号住居跡 検出状況（東から）



4号住居跡 遺物出土状況〈山陰型土器片〉（西から）



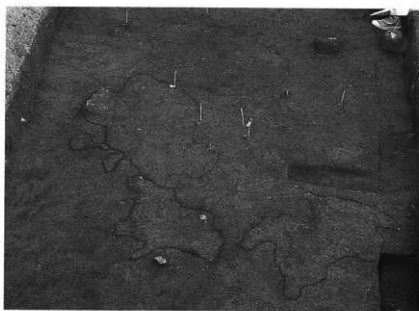
4号住居跡 遺物出土状況（北から）



4号住居跡 完掘状況（北から）



5号住居跡 遺物出土状況（北から）



5号住居跡 検出状況（東から）



下段 甕棺包蔵地区〈調査前〉（西から）



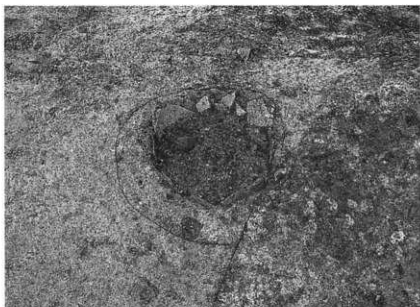
天神免遺跡〈手前下段、奥上段〉（西から）



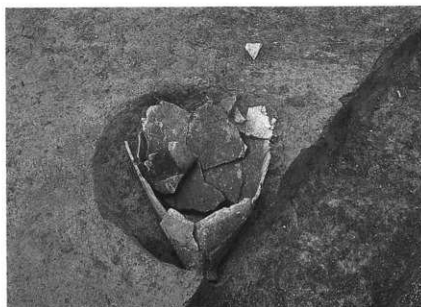
上段 表土剥ぎ



甕棺 土壌確認状況



1号甕棺 プラン確認（南から）



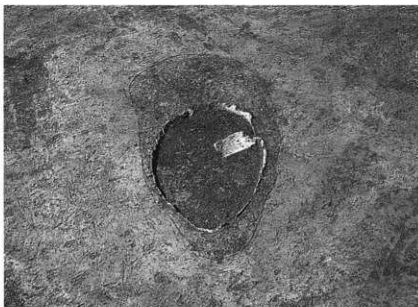
1号甕棺 検出状況（南から）



2号甕棺 プラン確認 (北から)



2号甕棺 検出状況 (北から)



3号甕棺 プラン確認（東から）



3号甕棺 検出状況（東から）



4号甕棺 プラン確認（南から）



4号甕棺 検出状況（南から）



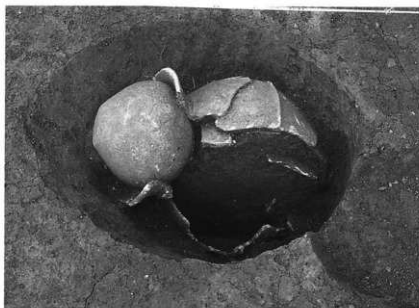
5号甕棺 プラン確認（南から）



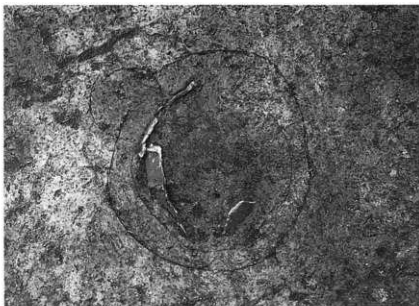
5号甕棺 検出状況（南から）



6号甕棺 プラン確認 (南から)



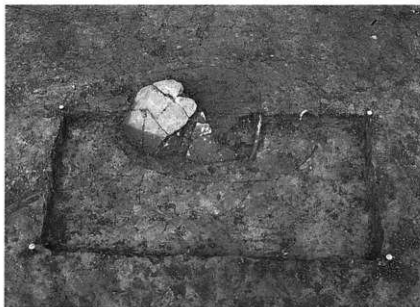
6号甕棺 検出状況 (南から)



7号甕棺 プラン確認 (東から)



7号甕棺 検出状況 (東から)



8号甕棺 プラン確認（南から）



8号甕棺 検出状況（東から）



9号雙棺 プラン確認 (東から)



9号雙棺 検出状況 (東から)



1号土坑 完掘状況 (南から)



1号木棺墓完掘状況 (東から)



2号木棺墓 完掘状況（北から）



3号木棺墓 完掘状況（東から）



1号住居跡 検出状況（西から）



1号住居跡 完掘状況（西から）



2号住居跡 検出状況（北から）



3号住居跡 完掘状況（北から）



4号住居跡 検出状況 (南から)



5号住居跡 完掘状況 (北から)



6号(奥)・7号住居跡 完掘状況 (南から)



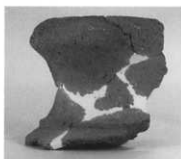
掘立柱建築物跡 (南から)



10-14



26-32



27-42



28-49

図版36 寺の上遺跡・向原遺跡出土遺物(1)



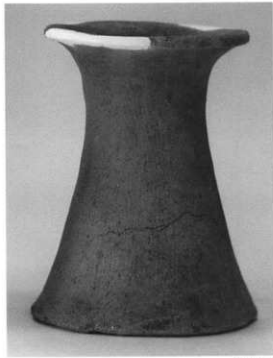
24-21



24-22



24-23

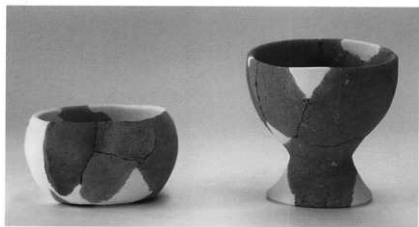


24-24

図版37 向原遺跡出土遺物(2)



24-25



23-11

25-29



25-30

図版38 向原遺跡出土遺物(3)



25-27



22-5



22-6



23-10

図版39 向原遺跡出土遺物(4)



23-9



41-4



図版40 向原遺跡出土遺物(5)

天神免遺跡



41-15



41-16



41-17



41-18

向原遺跡



20-3



20-1



20-2



20-4



20-5

寺の上遺跡



10-29



10-30



10-31



10-32

図版41 3遺跡出土石器

鹿央町埋蔵文化財発掘調査報告書
広寺の上・向原・天神免遺跡

平成13年3月30日

編集・発行／ 鹿央町教育委員会

〒861-0564 熊本県鹿本郡鹿央町広230

TEL 0968-36-2183

印刷／ 株式会社 ト ラ イ

文化財調査報告の電子書籍の末尾に挿入する奥付

この電子書籍は、『鹿央町埋蔵文化財発掘調査報告書 広寺の上・向原・天神免許遺跡』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

なお、平成 17 年(2005)に山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町が合併し山鹿市となりました。

書名: 鹿央町埋蔵文化財発掘調査報告書 広寺の上・向原・天神免許遺跡
発行: 山鹿市教育委員会

〒861-0592 熊本県山鹿市山鹿 987 番 3

電話: 0968-43-1651

URL: <https://www.city.yamaga.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日: 2025 年 7 月 9 日